

専門演習 海外フィールドワーク報告書

# ウルルン ‘タイ’ 在記

タイ  
(チェンマイ・プーケット・バンコク)  
2000年2月29日 ~ 3月11日



山口県立大学国際文化学部  
異文化交流論研究室

## 目次

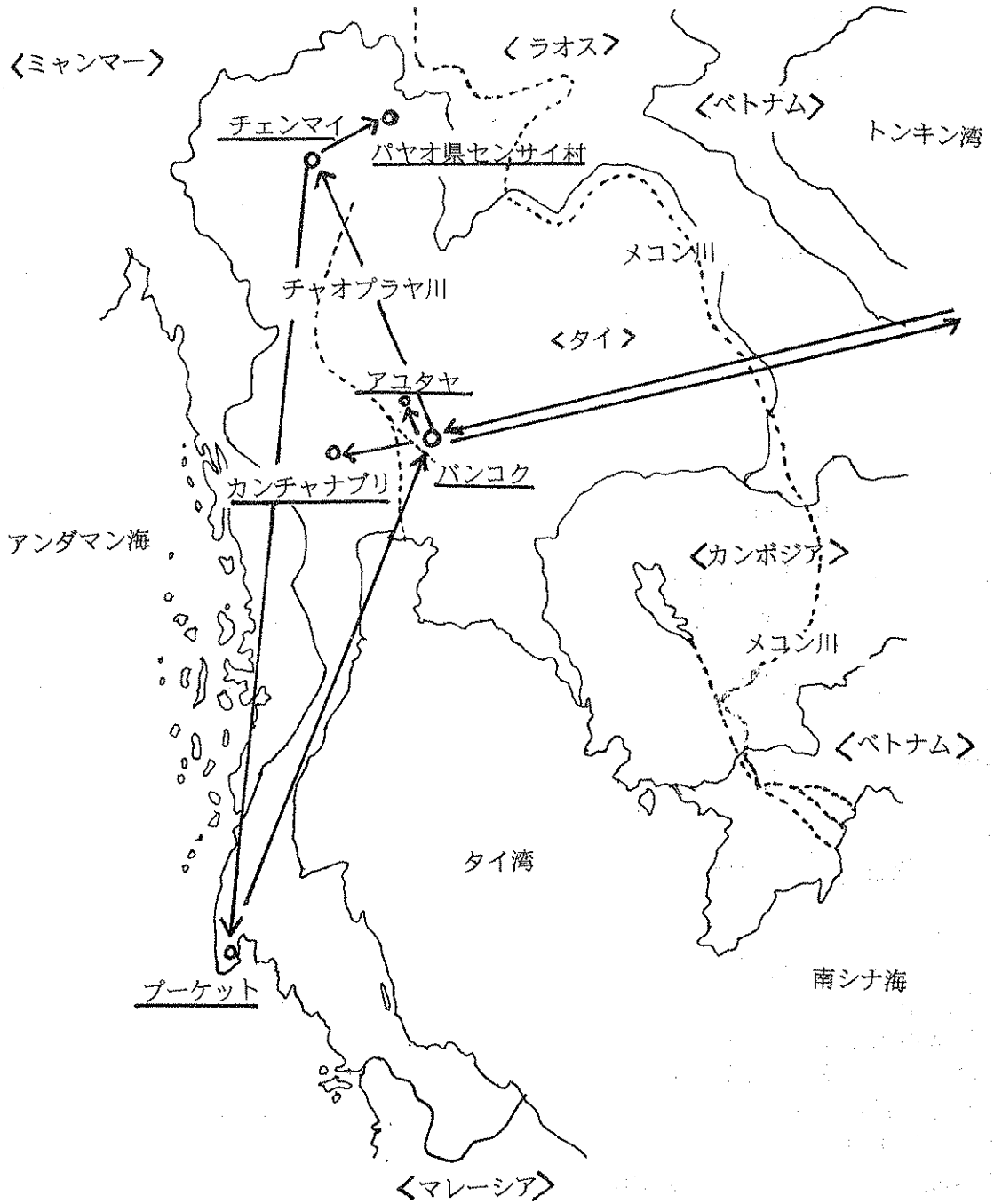
### パート I : スタディーツアー報告

第1章	シャンティの寮・センサイ村でのNGO訪問 —高校生・女性グループを訪ねて—	武田麻美 . . . . 1
第2章	タイの保育園を訪ねて —スアンプルー地区スーンデク保育園と センサイ村保育園—	村上理恵 . . . . 6
第3章	スラムの図書館を訪問して —「体験の搾取」から学ぶこと—	児玉知子 . . . . 9
第4章	タイの日本語教育現場 —ラジャパット大学、青年海外協力隊員 (日本語教員)を訪ねて—	澤江直美 . . . . 13
第5章	Tourism in Phuket —環境と観光—	奥田恭子 . . . . 16
第6章	旧日本軍の残した傷跡 —カンチャナブリ戦争博物館—	藤井 希 . . . . 21
第7章	在タイ日本大使館訪問記	奥田恭子 . . . . 26
参考文献		. . . . 30

### パートII : 異文化ミニ体験記

・「サワディーカッ」と「コープクンカッ」の落とし穴	N. S. . . . . 31
・チーオン (黄衣) をまとった人々	N. S. . . . . 31
・タイの王室	K. O. . . . . 32
・象って意外と毛が長いのね	N. F. . . . . 33
・「こわい」 —タイでは放送禁止用語です	N. F. . . . . 34
・タイで見つけた六本木	T. K. . . . . 35
・恐怖のくじ引き	T. K. . . . . 36
・良い品あります —タイの電話帳—	R. M. . . . . 36
・紙がない!	R. M. . . . . 37
・マイペンライ	M. T. . . . . 38
・日本の若者文化タイをいく!	M. T. . . . . 39

スタディーツアー順路



## はじめに —謝辞に代えて—

異文化交流論の専門演習海外フィールドワークは、今年で3年目の試みとなる。一カ所に長期間滞在してのフィールドワークと区別するため、スタディーツアーという言葉を使ってきた。

行き先について学生と相談した結果、1998年にはインドネシア・シンガポールへ、1999年には香港・英国へ、そして、2000年はタイへのスタディーツアーとなった。なるべくアジアと欧米とを交互に訪問したいので、今回は国連専門機関やEU本部のあるフランス・スイス・ベルギー・オランダあたりをと考えている。

さて、目的地がタイと決まってから、タイと交流のある方々から様々なアドバイスを頂いた。事前の手紙のやり取りで、そして現地で、それから私たちが帰国した後も、学生たちの体験学習が実りあるものであってほしいとサポートして下さった多くの方々、特に、タイ国政府通商代表事務所広島のパンニー・スワントゥピンタン所長、(株)宇部興産環境安全部の曾我部長、(株)大林組宇部事務所の伊豆本所長、山口県協力隊を育てる会前事務局長の荒瀬氏、シャンティ山口の末益事務局長、西日本国際交流協会の野村理事、SVA東京事務所の方々及びバンコク事務所の岩船氏、JICA中国国際センターの木村氏、周南青少年協議会の有馬氏に御礼申し上げたい。

個人的な体調の都合で、「激しく揺れる乗り物には乗らないこと」、「重い荷物は一切もたないこと」との忠告を受けての旅立ちであったし、往復10回にのぼる航空機の離着陸による気圧の変化がこたえたのか、あまり調子は良くなかった。しかし、そのため、かえって学生主体の旅ができたようにも思う。東北タイの山道5時間のトラックの旅、バンコク郊外2時間のミニバスの旅などはドクターストップがかり、現地の調整員や案内者と出掛けていく学生をホテルで見送ることもしばしばだった。手配は万全...とは思いつつ、元気でホテルに戻ってくる学生たちの顔を見るまではやはり心配で、無理をしてでも一緒に行けば良かったかなと落ちつかなかった。が、日に日に自立度を増していく学生たちの姿に、これでいいのかもしれないと思ったりもした。

旅立ちの半年前、フィールドワークに参加する学生たちと課題図書を選定し、約20冊を研究室に置いた。タイの文化や社会問題に関する様々な本を読んで、学生たちはそれぞれタイに関するイメージを膨らませていったのだったが、やはり現地に足を踏み入れ、現地で活動する日本人の話を聞き、タイ語やモン語はできないにしても、通訳を介して少しでも話をしようとする機会を持ったことで、先入観の一つ一つが変わっていったようであった。特に、日中のハードスケジュールをこなした後、夜になってからの学生同士のミーティングにおいて、インタビューの質問やまとめにはじまって、仲間同士のちょっとした意見の食い違いにいたるまで、明け方まで話し合うエネルギーのあることには脱帽した。このエネルギーが、「若い人たちの行動力に期待する」と言ってくださった多くの方々に応えるものとなるよう願っている。

帰国してから4カ月。今度はタイからモン族の高校生5名と引率2名が山口県にやってくる。7月25日に開催される日本の高校生とモン族の高校生との交流会では、開発教育のワークショップを引き受けることになった。スタディーツアーに参加した大学生が、高校生に何かを伝える場がこんなに早く来るなんて！ 学生たちも驚き、喜んでいる。

平成12年7月1日 岩野雅子

## パート I : スタディーツアー報告

# 第1章 シャンティの寮・センサイ村でのNGO訪問 —高校生・女性グループを訪ねて—

武田麻美

## 1. はじめに

今回私たちは、「社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）」が活動を行っているパヤオ地区のシャンティ寮とモン族の保育園を見学させていただくことになった。そこで、まずシャンティについて簡単な紹介をしたい。

シャンティは、1979年に発生したインドシナ難民の救済を目的に、「NGO・曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）」として発足。1981年に、「曹洞宗国際ボランティア会（SVA）」に改組、1999年8月には、「社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）」として新たに発足する。SVAは難民キャンプ閉鎖後も、タイ・カンボジア・ラオスの農村や都市スラムに活動の場を広げ、図書館活動・学校建設・奨学金支給・職業訓練・出版事業など、一貫して教育分野の支援活動を行ってきた。なお、SVAのタイ国内での活動は、現地法人「シーカー・アジア財団（SAF）」と提携・協力して行われている。

シャンティを訪問しようとしたのは、山口県内で活動するNGO団体の中で最も活発な活動を展開しているものの一つだからである。平成11年2月に山口市で開催された開発教育会議にゼミでボランティアとして参加した際、シャンティ山口のスタッフと交流する機会を持った。また、事前にシャンティの発行するレポートやニュースレターを送っていただき、参考資料とした。

## 2. パヤオ地区シャンティ寮

3月1日、タイに到着して2日目。ホテルを後にし、車で5時間かかるSVAの運営するシャンティ寮へ向かった。タイ東北部の山々をぬうようにして走る車からの景色は、木々の緑が鮮やかで、あちこちに広大な平地がどこまでも続いていた。タイ東北部特有の高床式の家が多かったが、意外に洋風の建物も目立った。この道は一昨年まではでこぼこ道で7～8時間以上もかかり、特に雨季にはとても通れないような状態だったようだ。

シャンティ寮はコンクリート造りの2階建てで、1階は広間と浴室、2階が生徒たち（小中高生）の部屋になっていた。寮のすぐ横にはモダンな造りのゲストハウスがあった。私たちが到着すると、生徒たちが色とりどりの民族衣装で私たちを迎えてくれた。この寮では、現在38人の少年少女が共同生活を送っている。

北タイ少数民族であるモン族（Hmong）は、もともと中国以北が故郷といわれ、清朝時代などの圧政を逃れてインドシナ（主にラオスなどの山岳地帯）に移住した。ベトナム戦争中（ラオス内戦など）に、アメリカ側はモン族を共産圏に対抗する部隊として使ったため、アメリカ軍の撤退以降、モン族の多くの人々がアメリカに難民として流れた他、タイなどの近隣諸国に逃れたという。ここに入寮している生徒たちは経済的に苦しく、放っておくと学校に行くのが困難な子どもたちで、全員が奨学生である。ここに入寮することによって、村から学校までの遠い道のりを往復歩いて通うことを避けることができ、家の仕事を理由に学校に通えなくなるのを避けることができる。寮費と学費は日本のNGOが負担している。入寮を望む子ども

たちは他にも数多くいるらしいが、寮の規模からいうと、現在の人数が限界らしい。

ここの生徒たちは朝5時に起床し、3つのグループに分かれ、それぞれ食事・掃除・植木の水やり等をする。7時に朝食、その後学校、4時に帰宅し、朝と同じくグループごとの仕事をす。夕食後はフリータイムで、各自好きなことをして過ごし、その後就寝。これが1日のスケジュールである。私たちはゲストハウスに宿泊し、生徒たちの作ってくれた食事を同じテーブルでとった。夕食後、生徒たちが私たちのために歓迎会を開いてくれた。生徒たちは色鮮やかな民族衣装を身につけ、ダンスを披露してくれたりギターを演奏したりして、私たちを歓迎してくれた。私たちもなにか出し物をということで、ジャンケンゲームを紹介し、生徒たちとともに楽しんだ。このゲームはとても好評だったようだ。

この寮で日本と大きく異なっていたのは、お風呂とトイレであった。お風呂は浴槽に張ってある水を浴びるというもので、日本の入浴のようにお湯につかる習慣はない。また、この水浴びは手を洗うのと同様に、一日に何度も行うのである。トイレはタイでは多くみかけたもので、紙は使わず、便器の横の桶から水を汲み流すというものであった。

現在タイでは、子どもの就学が大きな社会問題となっている。長い不況はタイ国の隅々まで影響を与え、子どもの就学にも影をおとしている。国家教育委員会の調べによると、98年度中に全国で約40万人の児童が義務教育である小学校を中退している。その主な理由は経済的なもので、教科書や制服、昼食代さえ払えない状況にあるという。こういった状況が麻薬・覚醒剤・売春や買春・ストリートチルドレンなどの問題へと結びつく。バンコクポスト紙は、

「5万人の学生が麻薬常習」とも報じている。このような経済危機は、東北タイなどから仕事を求めて都会のスラムに移り住んだ家族をも直撃し、また経済基盤の弱い東北タイの農村や少数民族の村々でも深刻な問題を生んでいる。こういったなかで、シャンティ寮の存在は、東北タイの少数民族にとって、大きな希望の灯となっている。

### 3. 高校を訪問

ところで、シャンティ寮に到着してまず言われたことは、トイレで履くゾウリを買ってくることであった。完成したばかりのゲストハウスには先ほど記したようなトイレがあるが、まだ来客用のゾウリまでは揃っていないかったのだ。

「歩いて1時間のところにある店まで歩く！」

町に向かって歩き始めてしばらくすると、寮の高校生が運転するトラックが私たちを拾ってくれた。

「高校生が運転するなんて！！」

町の外にあるシャンティ寮からトラックの荷台に揺られて、町はずれにある高校を通り（シャンティ寮の子どもたちは、この高校に通っている）、それから町の中に入って、商店の一軒でゾウリを買うつもりであった。急に、「高校に寄ってみないか」という話になった。アポイントメントもなにもないまま、私たちはモンの高校生に連れられて校舎に入っていった。コンクリート建ての大きな建物、花壇、グラウンドなどが整っており、とても広大な土地の中に校舎があるように思えた。生徒数は約400名。モンの高校生は野外で英語の授業をしている先生のところに行き、私たちを紹介してくれた。授業が終わるまでしばらく待っているように言われ、

授業を参観した。若い男性教師の英語はかなり高度なレベルで、30人ばかりの生徒たちも非常に熱心に授業を受けていた。生徒たちの態度はとても丁寧で、謙虚な感じがした。この男性教師はタイ人で、バンコクから赴任しているそうである。自分のニックネームは「パク先生」と教えてくれた。

授業が終わると、パク先生は私たちを校内に招き入れ、教室などを案内してくれた。教室は質素で、どこでもタイ国王の写真が掲げられていた。学内を歩きながら、パク先生は英語教育の問題について語ってくれた。第一の問題は、英語のテキストや教材が不足していること。第二は、生徒たちにインターネットのアクセスはあるが、海外とコミュニケーションする相手の少ないこと。第三は、英語を見かける環境の少ないこと。せめて校内でもという訳で、校舎や校庭のあちこちにバイリンガルの単語をかけるようにしているそうである。

この高校には、タイ人、モン族の他に、もう1つの少数民族の子どもたちが通っているが、パク先生の見聞限り、生徒の間で差別などはないということであった（ところが、あとで寮で聞いた話によると、実際にはモン族の子どもはタイ人の子どもから差別を受けているとのことだった）。モン族の子どもたちも、成績が良い者は政府からの奨学金を受けて大学に通うことができる。シャンティ寮でも、何人かの生徒たちが奨学金を受けて大学に行くのだと話していた。奨学金を得るために、多くの子どもたちが大変熱心に勉強している様子がうかがえた。モン族の高校生に聞いてみると、高校の先生たちは生徒一人一人の家庭環境をよくとらえていて、細かい配慮をしてくれるため、とても尊敬しているとのことだった。

帰国したらパク先生にまずe-mailを入れることを約束して、私たちは高校を後にし、町へと入っていった。その後のメールのやり取りを経て、私たちは現在、パク先生宛に送る英語のテキストや教材を集めているところである。

#### 4. プラガイゲオさん、チューサック君

さて、ゾウリを購入してシャンティ寮に戻った私たちは、夕食と歓迎会をすませ、さらに夜9時頃から寮生のプラガイゲオさんとチューサック君に話を聞く機会をもった。SVAバンコク事務所のモン族出身スタッフがモン語をタイ語に訳し、SVAバンコク事務所の岩船さんがタイ語を日本語に訳してくださった。私たちの質問はその逆の順序をたどるわけであるから、一つの話をするにも随分時間がかかった。さて、プラガイゲオさんは4人兄弟姉妹の2番目にあたる18歳で、奨学金をもらってチェンマイ大学に入学予定だという。寮のスタッフの紹介で入寮した。彼女の夢は教師になり、村の発展に協力すること。実家には月4、5回帰っている。ここにいる子どもたちは親が迎えに来てくれないと帰れないので、実家が遠くの子どもは滅多に帰ることができないというから、彼女は頻繁に帰ることができている例かもしれない。彼女にこの寮に入って良かったことはと聞くと、「住めるということ」と、「友人ができたこと」と答えてくれた。「住める」とは、安心して高校へ通えることかなと考えたりした。チューサック君もプラガイゲオさんと同じく18歳で、高校卒業後は兵隊になるのが希望らしい。彼はモン族の地位を上げるために、タイを発展させたいと語った。モン族はラオスからの難民で、タイではよそ者扱いをされているのにである。彼は月に2回実家に帰っているそうだ。



この2人に日本に対するイメージについて聞いてみたところ、「開発の進んだ国で、日本人は勤勉でよく働く」と答えた。また、「社会的・経済的・教育的に発展した国だと感じている」そうだ。このシャンティ寮からは2年に1回数名が選ばれ、山口県で開かれる交流行事に参加できるようになっている。これは、日本からタイへ行くだけでは一方向の交流にすぎないという理由から、双方向の交流を目指してタイから日本への道も開いた結果だ。日本の中高生がタイへ、タイの中高生が日本へという交流が、シャンティ山口の全面的な支援で成り立っている。

私たちに話をしてくれたこの2人は自分自身の未来に対する目標を持ち、輝いているように見えた。夢をもっている子どもたちは、彼らの他にもたくさんいる。勉強をしたいという子どもたちの夢でさえ現実になるのが大変難しいほど、現在、タイの農村部の生活は厳しい。せめて教育を受ける機会だけでも、すべての子どもたちに平等に与えられる社会や世界が構築されることを願う。世界が豊かになったかに見えるこの数十年間に、かえって世界の貧富の差が大きくなり、生活の質を落とさなければならない人口が増えているという国連機関等の報告はショッキングであるが、その一端を自分の目で見たことは貴重な体験であったと思う。

## 5. センサイ村を訪れて

翌朝、高校生たちと別れてシャンティ寮を出発。トラックの荷台に揺られ、風を感じながらセンサイ村に到着した。木造の建物がまばらに建ち、地面は舗装されていない裸の土、テレビで見たタイの農村はまさにこのような風景であった。モン族センサイ村の住民は約800人、117世帯であるから、比較的大家族世帯であることがわかる。この村にはSVAの運営する保育園があり、またSVAの人材育成事業の一環として、女性グループのクラフト事業の支援を行っている。クラフト事業とは、伝統的な蒙の刺繍を生かした衣類などを販売し、女性の地位向上、収入増、意識改革などを目指したものである。ここで作られた商品は、SVAバンコク事務所のショップや日本の通信販売などで売られている。

私たちは、まず初めに保育園を見学した。詳しくは本レポートの第2章をご覧いただきたい。その後、モン族の女性たちに村の現状やシャンティの支援活動などについてお話を伺った。彼女たちは30人くらいのグループをつくり、クラフト製作をしたり、様々なことを話し合ったりしているそうだ。モンでは伝統的に働くのは主に女性で、男性は1日中ごろごろしているらしく、村の発展には女性の力が必要なのである。女性が家事に育児にと忙しく働いていると聞くと、ぶらぶらしているという男性を見ると腹が立った。「男性の意識改革が先なのではないか」と声を大にして言いたかったが、通訳の人の話によると、伝統として続いている習慣を変えるのはなかなか難しいらしい。ただし、現在では多くの男性が現金収入を得るためにバンコクやチェンマイなどの大都市に出稼ぎに出ているそうである。だから、村に残っている男性は高齢者である。私たちも、この日ほとんど男性をみかけなかった。

この女性グループのクラフト製作はもう8年続いているという。村の現金収入はこのクラフトの売り上げのみだそうで、収入としては女性一人の月収は300バーツ。ちなみに首都バンコクでの平均月収は1万バーツである。東北タイでも子どもを高校に行かせると、年に4万バーツかかるというから、現金収入の少ない村では高校に行ける子どもは少ない。クラフト製作以外は畑仕事をしているのだが、畑までが非常に遠く、家事・育児の時間がなくなるそうだ。

そこで、小さな子どもたちに家事や育児をまかせて、泊まり込みで遠くの畑まで出掛けて耕作しなければならない。そうすると、小さな子どもたちが小学校や中学校に行けなくなる。村の近くのタイ人の畑を手伝えれば1日100パーツになるのだが、そうすると毎日行かなくてはならず、育児があるから限界があり残念だとも述べていた。モン族の畑がなぜ村の近くにないのかというと、モン族はもともと難民であり差別を受けていて、手に入れられる土地が遠方の山の高地などに限られているからだそうだ。

最後に、SVAの支援活動について聞いてみた。ある女性は、「シャンティのお陰で息子を大学まで行かせることができた」と涙ながらに語ってくれた。その息子は今は働き、仕送りをしてくれているそうだ。また別の女性は、「シャンティからモン族の子どもたちへの奨学金によって、将来その子どもたちがモン族の未来を切り拓いてくれることだろう」と述べた。このように話を聞いていると、SVAの活動がセンサイ村にどれだけ影響を与えているかが分かったが、文化や生活面への影響や、村の中での利益の分配などにおいて不公平な点などあるのかどうかは、言葉の関係で聞くことはできなかった。貧しい村はまだたくさんある。センサイ村と、その周辺の村との格差もできてしまったことだろう。SVAのような活動を行うNGOがたくさん必要なのである。

## 6. おわりに

今回シャンティ寮とセンサイ村を訪問し、NGOの直面する現状とその活動について知ることができた。こういった国際ボランティア活動の一つ一つは公表されるわけでもないし、見返りがあるわけでもない。一人一人のスタッフの「何か役に立ちたい」という気持ちが原動力となって運営されているのだなとつくづく感じた。SVAのスタッフの話によれば、一生懸命頑張ってもなかなかうまくいかなかったりすることは日常茶飯事だそうだ。それでも諦めずにこつこつ頑張ってきた結果が、今回訪問させていただいた活動のなかに現れているのだと思う。

一方で、国際協力・国際援助において本当に必要なことは一体何なのであろうか、という疑問も強く感じた。こちらはよかれと思ってしていることが、逆に迷惑になっていることもあるという。日本人スタッフ・現地スタッフのだれがそういった問題点を掘り出し、現地の人々の立場から解釈し、コミュニケーション・ギャップを埋めていくのか？ 今回センサイ村を訪れた際に、タイに滞在中の青年海外協力隊の女性も私たちに同行した。村の女性の話を聞いた後で、「やっぱりタテマエしか言わないね」といった言葉が耳に残る。援助してくれる側に対して、援助される側は不満が言いにくいだろう。ではどうやって本音を聞くのか？ 青年海外協力隊のこの女性にも答はないようだった。しかも、彼女自身のプロジェクトも失敗だったという話もあとで聞いた。

今回の訪問を通して、とにかく色々な角度から物事をとらえる柔軟さが必要だと感じることもできた。また、国際協力活動において、現地の人々の声やニーズをくみとるフィールドワーカーの役割の重要性にも気づくことができたと思う。現地語ができ、現地にとけ込んで、しかもグローバルな見地から援助活動の筋道をたてることができる人材。そういった人がNGO活動の中からたくさん出てきて、さらに、そういった人々をODAが信用するようなネットワークが必要だと考える。

## 第2章 タイの保育園を訪ねて

### —スアンプルー地区スーンデク保育園とセンサイ村保育園—

村上 理恵

#### 1. はじめに

私が今回のゼミ旅行に参加した目的の一つは、NGOによる海外の保育現場を訪問し、実際に子どもたちと触れ合い、現場で活動されている国際協力団体の方々からお話を伺って、その現状を知ることであった。今回訪問したのは、SVA（社団法人シャンティ国際ボランティア会）が保育園事業として展開しているバンコクのスラム、スアンプルー地区の保育園と、チェンマイ北東部にあるセンサイ村の保育園である。両方の保育園で子どもたちと交流し、スアンプルー地区の保育園では先生方にインタビューする機会を得ることができた。保育園の訪問に際してはSVAタイ・バンコク事務所の岩船さん、そして山口県SVAの末益さんと佐伯さんに同行いただき、モン語・タイ語・日本語の通訳をお願いした。

#### 2. 元気をくれた子どもたち

##### (1) センサイ村保育園

3月2日朝、私は体調がすぐれず、朝食もあまり喉を通らないままシャンティ学生寮を出発した。日本を出る時にひいていた風邪が、まだ長引いていた。一昨日正午に福岡を出発し、夕方5時にバンコク着、すぐにチェンマイ行きの国内線に乗り換えてチェンマイ到着後に、さらにナイトマーケットに出掛けた。昨日は早朝チェンマイを出発、車で山道を5時間以上走って、ようやくポンという村にあるシャンティ学生寮に着いた。そこで一泊し、今朝また車で出発。シャンティ寮に入っている中高生の多くの実家があるセンサイ村は、車で30分くらいのところにあった。

保育園に入ると、元気いっぱいの子もたちが広い園庭で楽しそうに遊んでいる姿が目飛び込んできた。朝の会で自己紹介をした後、一緒に遊ぶことができた。子どもたちは、手をつないだり、歌を歌ってくれたり（“大きな栗の木の下で”を日本語で歌ってくれた子どもがいて驚いた）、時にはいたずらをしてきたりして、それぞれの方法で私たちを受け入れてくれた。かわいい笑顔に囲まれて過ごすうちに、私の体調はすっかり良くなっていた。

園舎の中に入ってみると、壁一面に物語りの絵や子どもたちの作った工作物が飾られていて、天井からは向日葵のモビールが吊り下げられていた。その中にいるだけで楽しくなるような部屋だった。子どもたちはそれぞれ絵本を広げたり、おしゃべりをしたりして遊んでいた。日本の幼稚園や保育園に比べると、施設や設備の面ではとても及ばないけれど、子どもを取り巻く環境をできるだけ豊かにしたいという気持ちが伝わってくる気がした。保育園でいただいた昼食は、グリーンカレーとタピオカのデザートだった。カレーはとても辛かったが、デザートは冷たくて甘く、絶妙なバランスが保たれていた。食事の後、再び子どもたちと遊んでいるうちに帰る時間がやってきた。

帰り際、子どもたちに「さようなら」を言って私たちが車に乗ろうとすると、なんともあっさりとして、子どもたちは園舎の方へと向かって行ってしまった。「あれ？ さっきまであんなにくっついて離れなかったのに」と思っていると、子どもたちは道路がよく見える園舎の横に集まって、車が見えなくなるまで手を振ってくれていたのである。出会ったばかりの私たちにさえ、最後まで思いやりを欠かさない優しい子どもたちの未来が、明るいものであることを願わずにはいられなかった。

## (2) スアンプルー地区スーンデク保育園

3月8日の朝ホテルを出発し、バンコク市内から南へ30分ほど行ったところで車を降りた。スアンプルースラムという家が密集して立ち並ぶ中を歩いて行くと、その一角に保育園があった。スーンデク保育園は改装されたばかりで、とてもきれいな立派な建物である。都会にあるためか、園庭はセンサイ村保育園のように広くはなかったが、やはり子どもたちは元気に遊んでいた。

朝の会が始まると、子どもたちが集まって来てきれいに整列した。子どもたちは皆、制服の黄色いポロシャツと黒の短パンを着ていた。スラムの中の保育園で、どうして制服が着れるの...と、ちょっと不思議な気がした。朝の会で私たちの自己紹介を行った後、子どもたちと一緒に体操をした。とてもタイらしい雰囲気のある体操で動作はゆっくりしていたが、全身の筋肉を使う結構ハードなものだった。

朝の会が終わると、私たちはそれぞれクラスを訪問させていただいた。保育室の中は日本と似ていて、小さなテーブル4つと子ども用の椅子が置かれていた。私が部屋に入った時、子どもたちは粘土を使って遊んでいるところだった。その粘土板をよく見ると、ジュースの紙パックを切り開いてテープでつなぎ合わせ、紙パックの内側の銀色の部分が表になるように裏返したものだ。子どもたちは先生と一緒に、粘土遊び、踊り、ゲームなどをしていて、その内容は日本の保育園と特に変わりはないように思われた。ここで印象に残ったのは、強制的な一斉保育をしていないという点である。例えば粘土で遊んでいるとき、他の事に興味をもった子どもが粘土遊びをやめて違う遊びを始めても先生は止めたりしない。大部分の子どもたちが粘土遊びに満足した頃を見計らって、次の保育へと移るのである。とても自然な流れをもった保育だと感じられた。

## 3. 保育園の概要

SVAにはセンサイ、バーンサイ、ムアンパイの3つの村とスアンプルースラム地区に、4つの保育園を開いており、一つの保育園に平均して4~6人の先生が配属されている。先生の雇用形態は2種類ある。タイ政府の地域開発局から派遣されている場合と、SVAに雇用されている場合である。保育士になるためには基本的には保育士資格が必要で、短期大学の教師課程で取得することができる。保育料は一人につき1カ月300バーツで、払えない場合は無料となっている。運営費はSVA、地域開発局から派遣される先生の人件費はタイ政府が賄っている。日本人は保育には直接かかわっていない。日本人スタッフの役割は事業のコーディネーションで、事業の資金集め、スポンサーや協力者（日本政府を含む）との調整（申請・報告・調整・モニタリング）、事業のPRなど、日本側との様々な調整である。日本の保育園や先生の団体などがタイに行き、保育ワークショップを開いたり、タイ人の保育士を日本に招いて研修させることもあるそうだ。私たちが最初に感じたちょっとした違和感—スラムの中の立派な建物、制服を着た子どもたちなど—は、実は長い間にわたる寄付や助成金などによって少しずつ整備されたものであった。

スーンデク保育園では現在、2歳半から6歳の151人の子どもを預かっている。その内75%がスアンプルー地区の子どもで、25%はその他の地区から通う子どもである。入園の際には、貧困家庭や、母子・父子家庭などの子どもが優先して受け入れられる。というのも、タイの経済悪化で、せっかく向上していたスラム地区に大量の失業者が出て、家庭状況が困難な状況にあるからである。ここの職員は男の先生1人、女の先生5人と用務員1人である。男の先生は住み込みで、SVAでは唯一の男性保育士である。

#### 4. 保育内容

保育園では、子どもたちが健康、知恵、社会性を身につけ、バランスよく成長できるような保育を目指しているという。保育園は7時半から開かれ、8時45分からの朝礼で一日が始まる。9時からは各クラスでリズム、折り紙、おやつ、読み聞かせ、タイ語の指導などが行われる。センサイ村の保育園では、タイ語・モン語が併用されている。モン族の先生はモン語・タイ語のバイリンガルだが、タイ人の先生はモン語をうまく使えないため、協力してやっているらしい。スアンプルーラムにはタイ東北部からの移住者も多く、少数民族の言語を使う者もまた多いが、保育園ではタイ語のみが使われているようだ。タイでは小学校に入るとタイ語で授業を受けることになるので、就学前にタイ語の基本的な読み書きを学び、語学ハンディを軽減することも保育園の重要な役割である。11時からは昼食をとり、お昼寝の後、各自帰宅する。親の迎えが遅くなった場合は7時くらいまで延長保育となる。

保育園では一年を通して様々な行事が行われる。タイではソクラーン（正月）が4月中旬にあり、その間は全国的に休みとなっているため、4月下旬の入園式から新年度が始まる。8月には母の日、10月はアジア子ども文化祭、11月はローイクラトーン（灯籠流し）、12月は運動会、1月は子どもの日、そして3月の学年末保護者会議で一年の行事が終わる。この他にも保護者会は2カ月に一度、定期的に行われている。住民、特に子どもの人口の多いスラムの中で、保育園に通える子どもは幸運だ。SVAバンコク事務所では、保育園に通えない子ども達のために移動図書館を運営するなどし、子どもに教育的な環境を与える機会と、親の間に教育的な意識を高める努力をしている。日本のある団体から寄付されたという移動図書館

（バス）には、楽しそうな絵が描かれていた。子どもに教育をと思ってもお金のない親もいれば、路上で放っておかれる子どももいる。どちらの子どもにも現状を変える力はない。タイ政府や行政の力の及ばないところで、日本や世界のNGOがこういった子どもたちに希望の光を与えている。

#### 5. おわりに

子育てと保育は社会の動きと深く結び付いている。バンコクのスラムは経済発展に伴う都市と地方の格差が拡がる中、主に地方から流れ込んできた人々によって形成された。住居は沼地の上や高速道路の下などに建てられ、衛生状態も劣悪である。このような環境のなかで、経済的理由で教育を受けられない子どもも多い。

「21世紀を生きる子どもたちには、世界中どの国の子どもも良い保育環境で育ててほしい」と誰しも願っている。貧しさの中にも幼児教育が芽生えるのなら、それをより良いものにしたと教育者は考える。近年、NGO諸団体による教育援助が数多く行われており、幼児教育の分野においてもそうした援助がみられる。しかし、その中には日本の保育をそのまま輸出しているものもないとはいえないのが現状だそうだ。幼児教育の芽を伸ばしていく過程で援助は重要ではあるが、外国からの援助が伝統的価値観に大きな影響を与えることに留意する必要がある。現地に適した教育や保育の在り方が尊重されることが望まれている。すべての子どもたちの発達の可能性を重視し、その自立、自己実現を図ることのできるような社会環境を配慮し、育成に努めることは、子どもの人間形成だけでなく、社会全体にとっても大きな意味を持つものになるであろう。

今回のスタディツアーでは多くのことを学ぶとともに、“保育士になりたい”という思いをより一層強くする貴重な体験となった。ご多忙の中、私たちのために時間をさいてくださったナーリー先生とノイヤー先生、通訳とガイドをしてくださった岩船氏、旅行先でお世話になった皆様に感謝したい。

### 第3章 スラムの図書館を訪問して

－「体験の搾取」から学ぶこと－

児玉知子

#### 1. はじめに

タイのスラムを訪問するに当たって、インターネット上のホームページ『地球隊'91報告書』で、その発生起源を調べてみた。タイのスラムは、急激な国の近代化、工業化政策の歪みによって生じたものである。1960年代、国家経済社会開発計画が開始されてから、バンコクの商工業の発達には目覚ましいものがあった。しかし、人口の8割を越える農民と、その生活を支えて来た農業は完全に置き去りにされた。首都バンコクと農村部の経済格差は広がる一方で、廉価な労働力を大量に必要としていたバンコクは、農村からの労働者の住宅問題などに何らの対策を講じる事なく、これらが無秩序に受け入れた。当然彼らは劣悪環境に居を求めることとなり、立ち退き問題をはじめ、住環境、教育、麻薬、無国籍などの問題を抱えることとなったのである。

#### 2. スアンプルースラム訪問

3月8日の朝、私たちをスラムへ案内して下さる岩船さんがホテルのロビーに迎えに来て下さった。NGOのスタッフである岩船さんは、タイのSVA事務所で活躍されている方で、タイ語が堪能、シャンティ寮訪問の際にもお世話になった。バンコクではよくあることらしいが、旅行会社にうまく話が伝わっておらず、手配していた迎えの車が来ないために、タクシーで現地へと向かうこととなった。30分ほど走ったところで私たちはタクシーを降りた。車道から脇道を少し入った所に狭い路地がある。ここがスアンプルースラムの入り口だ。スアンプルースラムはバンコクの中心部、サトーン地区にあり、繁華街にも近い。人口約8千人で、国内で二番目の規模をもつ。タクシーを降りた直後から異臭を感じていたが、路地を進むにつれてそれは増していく。狭い道の両側には家がぎっしりと連なっていて、住人は座り込んだり寝そべったりして私たちを見ていた。犬や猫もぐったりしてとても番をしそうにもない姿である。そこら中に食べ物の匂いがし、油で何か揚げている場面を見る。商売をしているようだ。狭い道に狭い家、入り組んだ通りではあったが、私の想像していたスラム像よりも幾分明るいように感じた。というのも、通りから丸見えの部屋の中には扇風機やテレビがあり、通りの一角にはゲームセンターのような場所さえあるのだ。さらに驚くことに、扉もない板張りの住まいがあると思えば、重々しく鍵のかかった鉄筋コンクリート二階建ての家もある。スラム内にも「貧富の差」の拡大が起きているようだ。しかし、依然としてスラム街の環境は悪く、不衛生であることには違いない。雑然とした道を歩き、私たちはスアンプルースラム保育園と図書館へと向かった。

#### 3. 図書館事業

さて、SVAの図書館事業は、スアンプルーでは1982年から開始され、スタッフは館長とボランティアのワサナーさんの2名である。開館時間は9時から18時まで、年中無休で開館している。蔵書は現在7500冊あり、そのうち子ども用が4160冊、大人用が3340

冊である。貸し出し会員は、子ども137人、大人289人の計426人。会員は一人3冊まで5日間借りることができる。一日の利用者は80～90人にのぼる。図書館では読み聞かせや工作、お絵描きもするそうだ。館長さんが指導者となつてのダンス教室や、外国人による英会話教室も開かれ、たくさん子どもたちが参加している。また、図書館には定期的に外から医者が往診に来て、高齢者の方々は健康チェックができるようになっている。私たちが訪れたのはちょうどその時で、実際にその様子を見ることもできた。

Q：本の入手先はどこですか。また、タイ語への翻訳は誰が、どのようにしているのですか。

A：日本のSVA（シャンティ国際ボランティア会）から本そのものが送られてきたり、お金  
が送られてタイ国内で買ったりしています。その他、少しですが、タイ政府の補助金もあり  
ます。翻訳は日本でされます。タイ語訳を本に貼り付ける活動をするグループがあるの  
です。日本語のままの本は子どもたちが自分で絵を見て、ストーリーを作ります。子ども  
達は絵を見るだけでも楽しいのです。

Q：図書館の運営資金はどこから出ているのですか。

A：SVAがほとんど全部出しており、それにタイ政府の援助が少しあります。

Q：どのような本に人気がありますか。

A：「おおきなかぶ」、「11びきのねこ」、「ぐりとぐら」、「3びきのやぎとガラガラド  
ン」、「すてきな3人組」、「長靴をはいた猫」、「グラディッグラダッ」（タイの本）  
です。「おおきなかぶ」は読み聞かせの時、実際にかぶを引くまねをするなどして子ども  
が参加できるからだと思います。日本での絵本の読み聞かせは、ただ大人が読むだけのシー  
ンとしたものですが、タイでの読み聞かせは子どもを話に参加させてひきつけるのです。

Q：図書館の現在の問題は何ですか。

A：スラム内でも、テレビやインターネットに熱中して本に興味を示さない子どもが増えてい  
ることです。

Q：本の寄付はどのようにすればよいのですか。

A：翻訳できる本としてはタイ語に翻訳したものを貼り付けるだけでよいので、そういった本  
がよいです。あるかどうか事前にチェックしていただきたいです（約50冊）。

#### 4. オラタイ・ブーンラップさん

オラタイ・ブーンラップさんという、スランブルースラム出身の女性がいる。彼女は元シー  
カー・アジア財団奨学生で、現在モスクワに留学中である。将来は、ロシア専門の外交官にな  
りたいそうだ。図書館のすぐ近くにあるオラタイさんの実家に私たちも訪れることができ、彼  
女の母親にも会うことができた。家が貧しかったため、小さい頃から図書館に通って本を借り、  
図書館の二階で勉強していたそうだ。図書館に毎日のように通い、約一万冊の蔵書を読破した  
という。字の読めない母親を助け、素直で優しい子ども時代を送ったそうである。

オラタイさんは高校で放課後毎日フランス語の先生を追い回して勉強し、フランス語のス  
ピーチコンテストで優勝を果たした。タイ最難関のチェロンコラン大学に合格し、さらに外交  
官養成試験に合格するなど、スラム出身者としては考えられない快挙を成し遂げ、スラムの子  
どもや大人など多くの人々にとっての希望の星となった。スランブルースラム保育園の中にも、

この図書館を利用する子どもの中にも、オラタイさんを目標にする子どもが多いそうである。第2、第3のオラタイさんを目指して図書館に通う子どもたちのために、日本から毎年多くの絵本が寄贈され続けている。スラム出身のロール・モデルが誕生したことで、スラムに生きる人々の側と、それを支える日本人の側との間に、共通の夢の架け橋がかかったような気がした。

## 5. クロントイスラム訪問

ノイヤン館長にお礼を言い、次に私たちはタイ国内最大といわれるクロントイスラムへと向かった。スラム人口約10万人というから驚きだ。まず初めに、SVAバンコク事務所を訪れた。SVAバンコク事務所はスラムの真ん中、NGO活動のまさしく現場にあった。一階は図書館、二階は事務所・会議室・職業訓練所などになっている。また、一階には、ゴミと植木を取り替えるグリーン作戦に使う植木がところせましと置かれ、環境改善や保健衛生用に配るための石鹸づくりが行われていた。

図書館の入口には小さな池があり金魚が泳いでいて、汗ばむ暑さの中で、そこだけ涼しく感じられた。「クロントイタイ地区図書館」というこの図書館のスタッフは、ソムサクさん、パイさん、ペンさんの3人だ。また移動図書館もやっていて、日本のある団体から寄贈されたパンに本を積んで、バンコク市内のスラムを巡回するそうである。すべての地区に置くほどの本は入手困難なため、絵本を積んで、人形劇や読み聞かせもする。これらは、食べる前に手を洗う、腐ったものは食べない、といった基本的な知識をつけさせる内容になっているそうである。移動図書館は、週1回のペースで様々な場所へ回るのだそうだ。

二階の事務所で様々な質問をした後、私たちは岩船さんの案内でクロントイスラム内を歩くことになった。スラムの中は三地区に分かれており、とにかく広い。湿気が多く、ゴミや枯れ木の浮いた排水の溜まりの上に粗末な板張りの住まいがある。今にも崩れてしまうのではないかと感じるような簡素な作りである。出入り口には排水が染みている。当然、悪臭もする。不衛生極まりないといった環境である。スアンプルースラムよりも数段劣悪だという気がした。人々はそこで洗濯物を干したり、爪を切ったりと、普段の生活をしている。最も驚いたのは、下水の中を上水管が通っていたことであった。スラム内の貧富の差は歴然で、一人一人がやっと歩ける道もあれば、バキュームカーが汲み取りに回っていて日本となんら変わらないような通りもある。スラムの入口には川があり、その川の上にはまさにスラムというイメージの小屋といった感じの家々が並んでいたが、それらは取り壊されることになっているそうである。

クロントイスラム内には外国からの様々なNGO団体が事務所を設けており、タイ国内最大のスラムへの世界からの関心の高さがうかがわれた。スラム内を回って、すべての家に番号がついていることを示された。ここはモデルスラムとなっていて、NGOや住民の運動の結果、様々な改善がなされつつあるそうである。スラム住民の立ち退き命令を出していた政府も、近年ではモデルスラムとして認め、土地を借りる権利をはじめ、住民に市民権を与える動きをみせているという。

現在スラムでは麻薬問題が深刻である。「麻薬を買うならクロントイへ」といわれる程である。子どもは捕まっても罪が軽いので、親が子どもを売人にする場合もあるという。子どもは中学



生位になると、自分の住んでいる所の状況を理解し、将来を絶望視してdrugに手を出すのだそうだ。そこでSVAでは都会のスラムの青少年と農村部の青少年の交流事業も手掛け、お互いに別世界があることを知り合い、異なった生き方をしながらも青少年同士で心の育成を目指す活動を行っていて、成果も上がっているということであった。大都会のスラムに住む青少年と、タイ東北部の農村に住む青少年という、お互いに異なった意味での貧しい環境と戦いながら、そこからどうやって生きる道や生きる意味を見いだしていけるのか。日本の青少年が直面する問題も様々だが、「生きる」というギリギリの線で苦しむこれらのタイの青少年には本当に厳しいものがあると感じた。

## 6. おわりに

今回のスラム訪問で私の目に映った風景は、非常に衝撃的なものだった。今思い出しても胸が詰まりそうになる。しかしまた、忘れ得ぬ言葉がある。「体験の搾取」一岩船さんが、最後に私達に投げかけた言葉である。

スラムに住んでいる人にとっては、すき好んで住んでいる訳ではない不衛生な住まいを、明らかに自分たちより身なりの良い外国人が訳の分からない言葉を喋りながら見て回る。時折、指をさして顔を歪ませたりもする。気持ちの良いものでは決してないはずである。私たちは、自分たちの生活の良さを確認しに来た訳ではない。また、スラムに住む人々の生活の貧しさを確認しに来た訳でもない。「かわいそう」で終わってはいけない。

タイ国内にもこれだけの経済格差がある。急激な近代化がもたらしたものの、一スラムがここにあるということを一、その状況を知らなくては、伝えなくてはならないのである。では、誰に伝えて、どうするのか？

岩船さんは、「体験の搾取」の先で、日本の学生が、日本の人々が何か行動に出てくれることを、あるいはせめて何か考えてくれることを願って、スラムの案内という役を引き受けている」と言われた。スタディーツアーという名のもとに、今、年間に何百もの団体がスラム訪問を希望してくるといふ。私たちもその一つ。「体験の搾取」から何を学んだのか、そして、「体験の搾取」で終わらないために何をすべきかが、私たちに投げかけられた問いである。とりあえず岩船さんと相談し、絵本とぬいぐるみを集めて送ることを決めた。その次は・・・？

年間一萬円の学費で一人の子どもを高校に送る里親となるパンフレットを見て、ゼミ生一人が一年に千円ちょっとずつ出せばできるかな・・・と、話し合っている最中である。しかし、先進国に住む私たちにできることはもっと他にあるはずだ。NGOや市民団体などによる世界的な世論づくりが、国連や各国政府を動かす時代である。地球市民の一人としての自覚をつけ、その大切さを子どもたちを含め、他の人々に伝えていくことも大切だ。こういった結論から、この夏休みに北九州市で開催される模擬国連学生大会（サマーセッション：テーマは平和の文化の創出）と、山口市で開催される国際理解フォーラムinやまぐち（テーマは地球市民育成のための教育）に、ゼミとして参加することにしている。

そして、「体験の搾取」という言葉を教えて下さった岩船さんには、私たちが「体験の搾取」から何を学びつつあるかを報告したい。

## 第4章 タイの日本語教育現場

—ラジャバット大学、青年海外協力隊員（日本語教師）

を訪ねて—

澤江直美

### 1. はじめに

今回のフィールドワークでタイを訪れることが決定した時点から、タイの日本語教育がどのようなものであるのか考えていた。世界の日本語学習者数はタイは8位であるにもかかわらず、教師数は10位以内にも入っていないこと、学習者も教師もバンコクに集中し、地方では教師が不足していることなど、訪れる前にインターネットで調べたデータ面でのこと、そして実際にタイを訪れてみて、街にある「KUMON」の看板や日本のドラマ、アニメの吹き替え版の放送などを見て、タイで日本文化・日本語は学習者たちにどのように映っているのかという新しい興味も生まれた。

「言語は文化である」とよく言われるが、外国語として日本語を学ぶタイの学習者たちは、日本語という言語を通して日本の何をみるのか、そして日本語を母語とする私たちはそこから何を感じることが出来るだろうか。このような疑問を抱えつつ、バンコクから車で約2時間ほどのところにあるラジャバット大学に日本語教師として派遣されている青年海外協力隊の森千枝見さんにインタビューすることが出来た。

### 2. ラジャバット大学の日本語教育の概要

まず、タイの大学事情について説明してみたい。タイには、国立大学・総合大学・カレッジと、大学といっても3つの種類がある。ラジャバット大学はこのうち総合大学に相当する。

次にどのような学生が日本語を学んでいるかについて述べたい。まず、教育学部の学生が副専攻として日本語を学んでいる。教育学部の学生の場合は聞く、話す、書く、読むの4技能のほかに日本語教授法についても学んでいる。そして経済学部の学生も自由選択として日本語を学んでいる。この学部の学生の場合、観光ガイドになったり、日系の企業に就職することを想定し、会話重視の学習を行っている。最終的なまとめとして、学習者に添乗員になってもらい、研修でタイに来ている日本人の教員を客として、近くを観光するという試みもなされている。教科書は教育学部では「しん にほんごのきそ2」を、経済学部では「しん にほんごのきそ1」を使用している。また両学部に通ずる教科書としては「Japanese For Busy People」のタイ語版を使用している。レベルについては教育学部の学習者では4年間の学習修了段階で日本語能力検定3級程度、経済学部の学習者では4級程度となっている。

教師については、森先生のほかにタイ人の教師が2人いる。彼女たちは日本の国際交流基金で9カ月の研修を経てラジャバット大学で日本語を教えている。主な文法のパターンはタイ人教師が担当し、応用を森先生が担当する役割になっている。

### 3. 森千枝見先生について

ここで私たちのインタビューを受けて下さった森先生について紹介したいと思う。まず、驚いたのは若さだ。森先生は愛知県の出身で、広島大学の教育学部日本語教育学科を卒業されて、

新卒で青年海外協力隊の隊員としてラジャパット大学に派遣されている。2年間の派遣期間で、現在1年半の段階だそうだ。森先生はとても気さくで話しやすい印象を受けた。まず、先生は大学を卒業してどこか大学に行きたい、そして日本語を教えたいという気持ちがあったそうだ。そうするなら最も条件がよく、家族を説得しやすかったとの理由で青年海外協力隊を選んだそうだ。また、先生自身は大学3年の夏にイギリスのロンドンで教育実習を行った後、本格的に日本語教師になろうと決められたそうだ。

アジア系の学習者の場合と、英語圏学習者の場合、教師との関係は異なってくる。英語圏の学習者の場合、教師と学習者は比較的対等な立場にあるが、アジア系学習者（タイ人学習者もこれに相当する）の場合、生徒は教師を尊敬するという意識がある。森先生の場合、学習者とあまり年齢が変わらないことから、他の先生よりも学習者に近い関係にあると自分では考えるそうだ。生徒との近い距離的な関係は年齢だけにあるとは思えず、先生のパーソナリティーによるものも大きいと感じた。インタビュー中、私たちの質問に丁寧に分かりやすく答えて下さっただけでなく、ちょうどバンコクに用事があるとのことで帰りの車中においても日本語教育関係の話に限らず、いろいろとお話しさせていただいたのだが、とても楽しい時間を過ごすことが出来た。教師には教える上での技術や経験はもちろん重要なことだが、「学習者」＝「人」を引き付ける魅力が必要不可欠なものであると感じた。

#### 4. タイ（ラジャパット）大学の学習者について

本来なら、学習者に直接インタビューすることを願っていたのだが、3月はちょうど休み中だったため、ここではラジャパット大学の学習者について森先生に伺った内容を基に述べたいと思う。

まず、漢字のことについて質問した。タイは非漢字圏の国である。非漢字圏の学習者が漢字をどのように習得するのか興味があったため、最初のこの質問をした。漢字を教える際には、まず認知させることから始めるという。つまり、読みも書きも教えないで漢字を示しているだけということだ。そして、後から読む、そして、書くという段階を踏んで学習者に漢字を覚えてもらう。この方法は、日本語教育に限らず、小学校低学年の国語の授業でも実践されている。他には、例えば、山、日など絵から漢字をイメージさせ、この字は木偏の仲間としたり、「朝」という漢字を覚える時には「十を書いて、日を書いて、十を書いて、月を書く」と言いながら空書して、ひたすら書く、という方法も採られている。先生自身も漢字学習についてのより良い方法は模索中とのことだった。ただ、感覚の鋭い子はなんとなく、「ここをはねる」などの漢字を習得する際のコツが分かってくるとの話だった。

次に、学生たちは何が得意で何が不得意かを聞いてみた。まず、得意なことに関しては、コーラスとのことだった。教師の後に続けて文を言う練習が好きなようだ。ただよく見ると、実際には分かる学生しか言っていないことがある。しかしながら失敗を恐れずに発言してくれるそうだ。またロールプレイも好きなようである。前に出て何かをするのが楽しいらしい。反対に不得意なことに関しては、今まで習った事項を使って小さなレポートを作成したりするのは苦手なようだ。教室での練習やロールプレイなどは「聞く」、「話す」ことであり、レポートは「書く」、そして「読む」と言い換えが出来る。私たちの英語学習における得意、不得意

と逆であると感じた。

また、学生たちのもつ日本のイメージはどのようなものであるのか尋ねたところ、まず挙がるのは日本の漫画、ドラマ、音楽などのメディアについてだそう。昨年の本学での教育実習でも、中国の学生は「東京ラブストーリー」の主題歌を歌っていたり、韓国の学生は「スラムダンク」の本を買って帰ったりと、日本のメディアの影響力の大きさを感じたが、タイでも同じようなことがいえるようである。メディアという身近な媒体を通った日本は学生たちとの距離を縮めるのではないか。次に、トヨタ、ホンダなどの車、そしてソニーなどの工業製品などのイメージがあるようだ。そして、日本はお金持ちとっていて、行きたいけど行かない国と考えているという。

日本の流行はバンコクでもすぐに流行になる。若者の集まるサヤームスクエア周辺には、そういった日本の流行に敏感な店が集まっているそう。日本のファッション雑誌や音楽雑誌などもそのままのものが店頭で置かれていた。日本の若者文化やメディア文化、漫画やアニメがアジア諸国全体に及ぼしている影響を考えると、アジアの若者に対して共通のものを知っているという親近感をおぼえるが、それに対してアジア諸国の若者文化やメディア文化などを日本にいる私たちはあまり知らない。若者文化の「輸出過多」の状況といえる。

## 5. おわりに

今回学習者にこそ話は聞けなかったものの、森先生という話を伺いやすい人に恵まれて幸運だった。先生にとって日本語教師になって何がいちばんよかったと思うことかと伺ったところ、「自分のやったことがすべて返ってくる」という答えだった。逆にいやだと思えることは特にはないとのことだった。森先生と出会って、自分のなかの日本語教育に携わりたいという気持ちがいよりの強くなった。言葉を教えるという仕事は、一見単純なことのようにも思える。しかし、先にも述べたように「言語は文化である」ことから、教師という仕事は無限の可能性をもつ仕事であり、人に大きな影響を与える仕事なのではないかと痛切に感じた。

今回のタイ訪問を前に、本学の古別府先生、およびJICA国際協力事業団中国国際センターにお世話になったことをここでお礼申し上げたい。タイでは3月になると学校が休みになってしまうため、訪問先を探していただくのに時間を要した。特にJICAでは私たちの日程を基に、チェンマイ、バンコク、アユタヤ、カンチャナブリなどの都市の日本語教師と連絡を取って下さった。事前にチェンマイ大学に日本語教師として派遣された青年海外協力隊員のビデオを見ていたのでそこを第一希望としたが、チェンマイ大学への日本語教師の派遣は今も行っていないとのことだった。アユタヤに派遣されていた2名の教師もすでに帰国し、後任はいなかった。このことは、日本からタイへの日本語教師の派遣が一段落し、日本語教師としての現地教員の育成が進んだことを示すのか、あるいは派遣先の地方都市への移行が進んでいるのか、またはタイの人々の学習者熱が下がり始めたことを示すのかなど、今回の訪問を機にもっと調べていきたい。

## 第5章 Tourism in Phuket

### —環境と観光を考える—

奥田恭子

#### 1. はじめに

プーケット島 —タイ国内最大の亜熱帯性の島。その素晴らしい景観は”アンダマン海の真珠”と賞賛され、タイはもとより東南アジアのマリンリゾートの代名詞となり、多くの欧米人がホリデーにやってくる。プーケットの語源はマレーシア語の”プキット(丘)”。島内には丘陵が多く、変化に富んだ海岸線にはいくつもの独立したビーチが存在する。

透き通った青い海、白い砂浜、照りつけるような太陽・・・ここプーケットはリゾートには最適の場所である。私たちがここに到着したのは、日本ではまだ肌寒い3月4日。朝夕は比較的寒く、長袖の着用が必要だったタイ北部にあるチェンマイから飛行機で約2時間南へと下り、空港の外に出てまず感じたことは、「暑い!」。この日の日中の気温は木陰で36℃、ひなたで38℃、ビーチでは40℃ということだった。

私たちが今回の旅行にプーケットを加えた理由は、ゼミの時間に「切り売りされるタイ」というビデオを見たからである。その中で取り上げられていたのは、観光ビジネスによってプーケットで引き起こされている環境問題についてであった。その主な内容は、観光客のためのいくつものホテルによってプーケットのビーチが占領され、島民のためにはほとんど残っていないといった問題や、そういったホテルからの廃水によって海が汚染されているといった現状、ホテルやゴルフ場で環境客が使用する水の確保のために、島民は米の二期作を延期しろと言われていたこと、開発のために島内の山や丘や海が破壊され尽くしているといったことであった。そのビデオの中で、このような環境問題に独自に廃水を処理することで取り組んでいる唯一のホテルとして、ホリディ・インが取り上げられていた。私たちはこのことに興味をもち、ゼミ旅行のプーケットでの宿泊先としてこのホテルを選んだのである。

#### 2. Interview with the General Manager of Holiday Inn

世界的に展開しているホテルチェーン”Holiday Inn”。そのプーケット支店の支配人にインタビューすることが私の役目である。卒論のテーマを観光に関わるものにしようと考えていた私にとって、このインタビューは海外で実際に観光ビジネスに携わっている人から直接お話を伺えるという、またとない貴重なチャンスであった。Holiday Innはアメリカのホテルチェーンとしてスタートし、1980年代にシンガポールの企業に吸収されている。シンガポールの管理・運営方法は世界的に評価が高く、下落していたHoliday Innの価値を高める結果となっている。

プーケットのHoliday Innホテルの支配人の名前はMr. Wolfgang Meusburger。オーストリア出身の男性である。もっと高齢な方を想像していたが、まだ40代という若さに驚いた。背広姿の支配人をイメージしていたのだが、事務室に入って会議室に通された私たちはボロシャツ姿で笑顔で入ってこられた支配人に一瞬言葉を失ったくらいであった。支配人は私たちのために用意してあったジュース、ケーキ、コーヒー等のテーブルを指差し、「セルフサービスでどうぞ。」と言われ、インタビューはとてもカジュアルな雰

匪気のなかでスタートした。彼はタイ人の女性と結婚しており、タイの文化をとっても愛しているようであった。ただ一つの問題は、奥さんが英語で話すので、自分のタイ語が上達しないということだそうだ。

以下、私たちの交わした質疑応答を簡単に記す。

Q: まず最初に、個人的なことをお伺いしたいのですが、...。よろしければ、あなたが観光ビジネスに携わるようになった理由と、どのようにしてこのホテルの支配人になられたのかを教えてください。

A: 私はオーストリア生まれですが、私の両親は国で小さなゲストハウスを経営していました。つまり、私はこのビジネスのなかで育ったのです。この業種に興味をもったので、私はオーストリアのホテルスクールで2年間勉強をしました。そして、29歳の時に私はViennaでレストランのオーナーになったのです。それから、アジアに興味があったのでアジアの色々な国のホテルに履歴書を送ったのですが、全部駄目でした。けれどもタイのバンコクでホテルを営んでいる友人から連絡があり、彼のホテルで働かせてもらっていました。それからここHoliday Inn にやってきたのです。

Q: 私たちは、Holiday Innが廃水のリサイクルを行っているということをお聞きしました。これを行うことによって余分なコストが掛かっているのですか、それともこれは経費節減になっているのですか？

A: もし廃水のリサイクルをやめたらホテルの運営費は節約されるでしょう。でも、これはとても短絡的な考え方だと思います。長い目で見ればこれは結局私たちのためになるのです。今までは政府の機関が水をリサイクルしていました。が、結局負担が重くなり、政府だけでは廃水を処理仕切れなくなってきたので、各ホテルはそれぞれ自分達で廃水を処理しなければならなくなりました。13年前の乾季にはホテルの水の需要が大きいため、農業用の水が足りなくなり、それが地元の人にとっての深刻な問題となっていました。ですが、今ではほとんど全てのホテルが独自のシステムで水をリサイクルしています。こういった環境への配慮なしには、観光ビジネスではもう生き残ることが出来ないのです。

Q: こういったビジネスを行う上で、ホテルの利潤を追求することと、プーケットを観光客にとって魅力的な場所とするためにも環境保護をすることとのバランスをとる必要があると思います。この問題を、ホテルの支配人としてどのようにお考えですか？

A: 観光業は今、プーケットでどんどん膨らんできています。アジアの経済危機によってタイの通貨であるバーツの値が下がり、欧米人がタイに来やすくなりました。ここに来る観光客の大部分はヨーロッパ人とオーストラリア人です。もし、あなたがここに住んでいるのなら、あなたはここの環境のことを熱心に考えるでしょう。しかし、ここにただ観光やビジネスでやってくる人々はそういったことに無関心です。実際、プーケットに住んでいる人のほとんど、約80パーセントの人々はここ出身ではないのです。だから、彼等はほとんどここの環境について考えていません。

ですが、もしも私が観光客で、何時間も飛行機に乗ってここにきてビーチが汚かったら、とてもがっかりするでしょう。そして、2度とここには戻ってこなくなる。つまり、ビーチをきれいに保つこと、つまり環境を保護することは、ホテルにとっても利益になることなのです。プーケットが観光によって発展するまで、つまり15年前までは、ビーチなんて何の価値もなかった。いまこのホテルが建っている土地の値段はたったの100万ドルでした。ですが、ここに住むほとんどの人々が観光業に関わっている現在、その同じ土地の値は2億5000万ドルにもなっています。このような状況下で今問題になっていることは、土地の人々にはもうほとんどビーチが残されていない、ということです。しかし、ここの人々は強いのでこの問題はだんだんと改善されつつあります。

Q：ホテルの顧客として、ある特定のグループの人々に照準をしばったビジネス展開をされているのですか？例えば、特定の年齢層、職業、国籍など...

A：特に、特定のグループにターゲットを絞っている訳ではありません。ですが、このホテルには、11月から3月まではヨーロッパから、4月から11月まではオーストラリアからの顧客が多くやってきます。実際、プーケットにやって来る観光客の60パーセントはヨーロッパからの人々で、彼らはヨーロッパの冬にうんざりしてここに逃げてくるのです。また、私たちのホテルにはリピーターが多い。全体の顧客に占めるリピーターの割合は23パーセントと、この業界ではとても高い数字になっています。タイは、観光業を行なうには最適の場所だと思います。ここの人々の物腰がその最も大きな要因となっています。タイ人にはもともとホスピタリティの精神が備わっている。とくに、微笑み方に学ぶところがあると思います。このホテルでは、従業員に対して英語のトレーニングや研修を取るように勧めています。その結果、試験に合格するとすべての授業料をホテル側が持つ仕組みになっています。もちろん、試験に通らなければ、立て替えた授業料は本人がホテルに払い戻さなければなりません。そのため、従業員は熱心に研修に取り組むので、彼らの英語力は向上します。

Q：異なった国からやって来る人々に、それぞれ満足のいくサービスを提供するのは、難しいに違いないと思います。例えば、日本人とイギリス人では食べ物やサービスや、ことばへの要求や期待が異なるでしょう。この問題にはどのように対処されていますか？

A：特にその問題には重点を置いてない。というのも、「良いサービス」というのは、世界中で共通するものだと思うからです。このようなビジネスにおいては、最も重要なのはサービスと従業員の態度です。例えば、お客様に対する従業員の対応が親切でなかったとする。これに対してそのお客さんは文句を言うかもしれないし、言わないかもしれない。ただ確かなことは、その人は2度とこのホテルを利用しない、ということです。私たちはより質の高いサービスを提供するために、1年に1回の評価調査をおこなっています。これは全ての従業員に彼らの仕事に対する詳細のフィードバックを行わせるものです。これは無記名で行なわれるので、従業員は彼らの職場環境についても厳しく批判してきます。このような批判を受けるのは苦しいことですが、このホテルグループは、この調査に多額の費用

を投じています。というのも、この調査によってホテル自体が改善されるのと同時に、従業員が自分の仕事を意識するからです。これによって、この会社の従業員の離職率はとても低くなっています。この調査は外部の専門家に依頼して行われるものなので、評価基準も方法も、誰にとっても客観的なものとなっています。

### 3. おわりに

私にとって、今回のインタビューはとても興味深かった。観光と環境のバランスの難しさが取り沙汰される中で、その問題にうまく対処しビジネスを展開しているホテルの経営者から直にお話を聞くことができたからである。今は余計な経費がかかっても、これがいずれはこの業界で生き残ることができる方法なのだ、廃水のリサイクルにいち早く取り組んだ支配人の長期的な物の考え方に感動した。

このような長期的な視野をもつことの大切さについては、ビジネスに関わりのない私たちにも同じことが言えると思う。地球環境があってこそ私たちである。このまま際限なく資源を使いつづけていけば、きっといつか私たちの生活は成り立たなくなる。その前に立ち止まり、たとえ余分な経費と手間がかかろうとも再利用できるものはリサイクルすることが、結局私達のためになるのだということに改めて気付かされた。

インタビューの最後に、ホテルで行っているという評価調査の詳細な資料を見せていただいた。とても分厚い評価報告で、どのような項目についてどのような設問をし、回答者にはどのような選択肢があり、どのような結果と今後の改善策が考えられるのか等が記されているものだった。それらはシンガポールの企業が親会社となってから、世界中のホリデイ・イン・ホテルのチェーン店全てに対して行われているもので、ホテル間の比較もなされていた。

また、ホテルでは宿泊客へのアンケート調査にも工夫をこらしていた。毎日の宿泊客の中から年齢と家族構成、エスニックバックグラウンド、滞在期間などを考慮し、対象者を選んで直接記入をお願いし、回収率を高めるというものであった。ホテル内のサービスも種々で、子ども対象のいろいろなアクティビティーが毎日開かれていたり、大人対象のスペシャルツアーやクラスなども工夫されており、平均して1~4週間滞在するという宿泊客のニーズに応えようとしていることがうかがわれた。1階のビジネスセンターでは最近のニーズに応じて、安い価格でインターネットが利用できるようになっていた。これらのサービスや評価が、日本のホリデイ・イン・ホテル・チェーンではどのようになっているのか調べてみたいとも思う。

支配人の言葉で少し耳が痛かったのは、日本人の団体ツアーに対する批評であった。プーケットのホリデイ・インでは何度か日本人の団体を引き受けたが、日本人あるいは日本の旅行業者が数多く出してくる要求に応えるには問題が多いため、今は控えめにしているとのことであった。より詳しく言えば、団体ツアーとして日本の旅行会社は他の国からの団体より多くの要求やサービス、割引料金などを求めるので、利益との割が合わなくなるとのことだった。お話によると、ヨーロッパからの団体を主として取り扱うホテルと、日本や韓国、台湾や中国などからの団体を取り扱うホテルなどに「住み分け」がされているとのことだった。それぞれの期待するサービスというものが異なるからというのが理由で、このことは、先に支配人自身が述べた「世界に共通する良いサービス」の他に、何か文化的な要因が加わるとも考えられる。



この点について、卒論でもう少し調べてみたいとも思う。

部屋に帰ってみると、支配人からのプレゼントが届いていた。それは支配人からのメッセージ入りの名刺とホリディ・インの本、それにフルーツの沢山盛られたカゴだった。こんなところにも支配人の心配りがあるのだなと、改めてホスピタリティ精神というものについて考えさせられると同時に、なんだか次に泊まるのもホリディ・インといった具合にリピーターになってしまいそうな気がした。

## 第6章 旧日本軍の残した傷跡 —カンチャナブリ戦争記念館—

藤井 希

### 1. はじめに

異文化交流論で一度、またタイへのスタディーツアーが決定してから再度、『「戦争を知らない高校生たち」の戦争との出会い』という国際理解教育の論文を読む機会を得た。そこには、現地をワークキャンプで訪れた日本の高校生が、戦争博物館の展示物に英語とタイ語しか書かれていないことに疑問を感じ、泰緬鉄道、いわゆる「死の鉄道」建設の当事者である日本人が理解出来るようにと願って、日本語訳を作成する過程が描かれていた。恥ずかしい事にこの時まで私は、東南アジアで唯一植民地化されていないとされるタイにおいてまで、旧日本軍の残虐行為が行われていたという事実を知らなかった。

平和教育のプロセスの一番初めにくるのは、戦争の実態を知ることだという。それを知らなければ、戦争の原因を分析したり、平和のために行動したりすることは出来ないとされている。今回、フィールドワークの一環としてタイの戦争博物館を訪れたことで、私は平和教育の一番目のプロセスを体験することが出来たように思う。そして、この報告書を読む人にタイの戦争被害の様子を伝え、その存在を伝えることが、私の平和のための活動の一歩になればと思う。

また、実際にこの翻訳を行った高校生を指導された先生方に連絡をとり、詳しい資料をいただくことができた。特に、国立教育研究所の永田佳之先生にこの場で御礼申し上げます。

### 2. 事前に

今回、旧日本軍の残した傷痕を未だ残しているカンチャナブリを旅行するにあたり、私と同年代の人々ははたしてどれだけ「泰緬鉄道」の存在を知っているのか、また、彼らは戦争をどのように捉えているのかという疑問が浮かび上がり、事前に県立大学の学生10名にインタビューを試みた。ここでは特に印象深かったことだけ、要約して掲載したいと思う。

「『死の鉄道』と呼ばれる「泰緬鉄道」の存在を知っていますか。」という質問に対し、「知らない」は7名（内1名『戦場に架ける橋』見たこと有）、「知っている」は3名（この3名はゼミ生）であった。全員道徳や歴史の授業で戦争について学んではいるが、「ヒロシマ・ナガサキ」に最も力が入れられており、被害者としての日本のイメージが強調されていたような印象を受けた。また、修学旅行では全員、「ヒロシマ・ナガサキ・オキナワ」のいずれかに行っていた。そのため、原爆投下の日と終戦の日は知っているが、第2次世界大戦全体のこと（例えば死者数など）になると、全くといっていいほどわからないといった様子だった。そして、広島出身の人は、他県の人に比べて平和教育のために時間が多く割かれていたということもわかった。また、高校の歴史の授業では実際には大正時代までしか進まず、それ以降のこと、例えば第一次、第二次世界大戦などについては、自分で資料集の手記などを読んだだけという人もいた。

「あなたにとって戦争とは？」と問いかけたところ、大抵の人が「合法に無理やりさせられている殺人」という感じ、「あつてはならないこと」「正当化される戦争なんてない」「人権侵害だと思う」のように、戦争への拒否反応を示していた。その内の1人から、「戦争の話

を聞いて、感想文ではきれいごとを書き、その時は本当にそう思うけど、やっぱり他人事」という答えが返ってきた。この答は、現在の日本人の真意をついていると思う。実際、「旧日本軍が犯した過ちについてどうとらえるか」という問いかけには、「理解できない」などのような他人事のような意見が多かったし、国家に反抗出来なかった当時の日本兵を哀れむ声などもあった。

### 3. 泰緬鉄道とは

旧日本軍の命令によって1942年10月から1年がかりで作られた、タイービルマ間(415 km)を結ぶ鉄道。約6万5千人の連合軍捕虜(香港やシンガポールから、列車や徒歩で連れてこられた)と、約30万人のアジア人労務者の強制労働によって建設された。あまりに過酷な労働と疫病、飢餓のため多くの死者を出し、「死の鉄道」といわれた。死者数は明らかではないが、連合軍の大部分はイギリス人やオランダ人、オーストラリア人などであり、その何倍ものアジア人が亡くなったという。この他、当事日本人とされていた韓国・朝鮮人も多く亡くなっている。また、鉄道が完成した後も約3万人の連合軍捕虜らが残され、1945年の終戦まで鉄道修理等の作業にあてられた。列車の幅が日本のサイズで作られていたため、現在は126 kmしか使われていないという。この鉄道を使う場合は日本から列車を運ぶ必要がある。

タイ・カンチャナブリのクワイ川にかかるクワイ河橋は、映画「戦場にかかる橋」の舞台となり一躍脚光を浴びた。この映画では旧日本軍による連合軍捕虜の酷使が最大の悲劇であるかのように読み取ることが出来るが、実際には最大の犠牲者はアジア人労務者であった。20万から30万ともいわれるアジア人の死者の中には、インドネシア、シンガポール、マレーシアなど東南アジア系の一般人が多数含まれていたという。タイ人のガイドさんによれば、この中にタイ人は殆ど含まれていないそうだ。彼は、「タイ人はごますりが上手くて、あまり殺されなかった」と冗談交じりに話していた。確かにタイ人の外交術の巧みさは有名だし、アジアで唯一植民地化されなかったことなど、その言葉を裏付ける証拠は沢山ある。しかし、熱心な仏教徒の民族であることを考慮すれば、その言葉をうのみにするのは失礼であろう。平和主義的なタイ人の資質に加え、当時の日本政府とタイ政府のかけひきが予想される。これは当時タイがプーケットの戦場で日本軍に負け、1941年に旧日本軍と友好協定を結ぶことに同意したことによる。つまり、日本とタイは同盟国のようになった訳であるから、タイ人はこの鉄道労務にかり出されずにすんだのである。更に、終戦間際になってタイ政府は日本との同盟を破棄し、連合軍側についたため、敗戦国となることをまぬがれている。

### 4. JEATH戦争博物館

この博物館は、町の東西、メー・クロン川に面している。博物館はワット・チャイチュンポン(Wat Chai Chumphon: タイ語で「勝鬃寺」、ビルマとの戦いの勝利にちなむものという意味)の敷地内にあり、僧たちによって管理されている。

この博物館は、旧日本軍が捕虜の収容所として建設していたものを再現した竹づくりの建物である。この名称の由来は、「死の鉄道」に関連する6か国(日本、英国、米国、オーストラ

リア、タイ、オランダ)の英語国名を頭文字を「死=DEATH」にもじって並べたことにある。当初は、「DEATH(死の)博物館にしようという案もあったが、あまりにリアルなネーミングのため、タイ人が創作したといわれている。館内はコの字型になっており、小規模のため、1つ1つの展示物をきちんと見て回っても20分程度で終了してしまう。通路の右側には当時を伝える写真、捕虜によるスケッチ、水彩画などが展示され、左側にはJEATHの成立過程と現在の様子が、写真と手紙を交えながら展示されている。

右側の展示物の下にはそれぞれ日本語訳があったが、額の上に日本語訳の紙が貼られた状態だったため、開館当初はなかったが日本人の訪問者が増えたため付けられたものではないかと思われた。展示物の内容としては、写真は当時の自然、人間、泰緬鉄道等の状況を表しており、拷問など目を覆いたくなるものはあまりなかった。旧日本軍の側から撮られた写真なのだろうか。一方、絵の方には激しい拷問の様子や病人の悲惨な待遇などが記されていた。ガイドさんが説明してくれた2・3枚の写真と絵はここでのメインとなるものようで、治療にボルトが使われていたことなど、どれも残酷で生々しいものばかりが描かれており、私たちの顔はこわばっていた。

左側の展示物には殆ど日本語の解説はなく、新聞や手紙なども英語のみで書かれていた。詳しくは読み取れなかったが、そこには被害を受けた側の国の首相が訪問した事、捕虜の現在、永瀬隆氏の功績等が書かれていた。永瀬氏は、捕虜及びアジア人労務者たちへの贖罪につとめたという人である。彼は、鉄道建設隊付の通訳をしていたため、犠牲者への償いの気持ちから、生存者への生活支援や医療体制作りに私財を投じ、さらに死者のために寺院を建立したり、元英兵との和解の集会を実現するなど、尽力されたという。

この博物館内では日本人の2団体とヨーロッパ系外国人2人と出会った。Visitor's Bookにも日本人の名前が6人に一人ぐらいの割合で書かれていた。ただ一つ気になったのは、私たちより後で来た日本人の団体が展示をじっくり見る訳でもなく、足早に館内を通りすぎて帰ってしまったことだ。別に来たかった訳でもないが、ツアーに組み込まれていたから来たという感じであった。また、これはチェンマイやアユタヤでも気になったことだが、日本からの団体は高齢者のツアーが多く、ここカンチャナブリにおいても戦争と平和について考えるというよりは、クワイ河鉄橋という懐古的なイメージにつられて訪問しているにすぎないような雰囲気のあることである。

## 5. 戦争博物館

この博物館は、クワイ河橋の下流すぐの所にある。日本の高校生が展示物の翻訳をしたのは、この博物館である。1993年に chansyree 氏という個人の手で建てられた中国風の建物で、またの名をアートギャラリーというだけあって、第2次世界大戦に関する展示はごく1部に過ぎない。とにかくきらびやかな作りで、宝石や貨幣、美術工芸品も展示されており、門をくぐってすぐ目につく辺りでは戦争の悲惨さは伝わって来なかった。ガイドさんが、私たちの行きたい博物館とは別の所に連れて来たのではないかと思わせるほどであった。

そして、どうやらここがその博物館らしいとわかった後も、一向に高校生が訳したと思われる展示物が見つからない。ガイドさんも知らなかったようで、そこで工事をしていた人に聞いて

て初めて、敷地内の奥にある階段を降りて、川沿いに向かって行けばあるということがわかった。こう教えられても階段の場所を探すのに苦勞したほどであった。

階段を降りてすぐ目に入ったのは、等身大の負傷した捕虜たちが横たわっている姿であった。高校生たちが衝撃を受けたということをやっと実感する。蠟人形が異様に怖いように、この人形も戦争の恐ろしさを増長していた。そしてその狭さ、暗さも恐怖心を煽るに十分な役割を果たしていた。しかし、その展示を見終えた私たちを待っていたのは、まるで物置のような雑然とした世界であった。工事中のため埃っぽく、展示品にまで埃がかぶり、壁の絵がはがれかけている所もあった。高校生が訳したものは拡大されて額に入っていたが、柱にこっそり立て掛けられているといった感じで、その存在を知らないで行った人がどれだけそれに気づくのだろうかと思った。説明文の英語を読み取るだけでも労力があるのに、高校生たちはそれを書き取って日本語訳にしたわけだから、その行為には脱帽せざるをえない。だからこそ余計、ただ柱に置いてあるだけということにやるせなさを感じた。例えば、展示してある写真は高い位置に掲げてあり、見上げなければならず、眼の前に迫るものがない分、戦争の悲惨さも

J E A T H博物館に比べれば伝わりにくかったように思う。

戦争博物館が個人の手で建てられたということは、タイ政府も日本政府も、この問題に触れたくないということなのだろうか。この博物館をもっとしっかりしたものにするような助成金を申請する団体も、助成金を出す団体もないのだろうか。元連合国側の政府もなにもしていないようである。映画「戦場に架ける橋」のイメージと、今回私たちが訪問した2つの戦争博物館の現状とのギャップに、人々の記憶に埋もれてしまう歴史の1ページを見たような気がする。

この博物館では日本人に出会わなかった。J E A T H博物館の辺りではまだいた日本人の団体も、クワイ河鉄橋周辺になると全く見かけなくなっていた。たまたまということもあるのかもしれないが、バンコクやアユタヤでは春の旅行シーズンや卒業旅行シーズンとも相まって、「ここは日本の観光地か？」というほど多くの日本人に会っていたわけだから、「泰緬鉄道」の存在意義が人々の記憶からどれだけ忘れ去られているかということがわかるだろう。

## 6. おわりに

J E A T H博物館を見ていた時、あまりに衝撃的な展示物の連続に、ガイドさんが「見るだけです。考え過ぎないように。昔のことです。」とってくれた。この言葉はJ E A T H博物館にある、"FORGIVE, BUT DO NOT FORGET"に似ている気がした。だから私は勝手に、平和主義的な仏教徒のタイ人の多くが、もう日本人のことは許してくれているのだと思っていた。ガイドさんが、以前は日本のことを悪く書いていたタイの教科書も、今は良く書いており、西洋人より良く書かれていることも多いと教えてくれたことも影響していたと思う。しかし、本当に全ての人があるような気持ちなのだろうか。クワイ河橋建設にはアジア人のみならず、連合国の捕虜の人たちも携わっていた。以前読んだ『イエロー 差別される日本人』には、イギリスでの日本人差別の背景には、日本の捕虜虐待とその後の対応のまずさがあると書かれていた。加害者側は記憶をあいまいにしがちだが、被害者側はいつまでもそのことを覚えている。特に当事者ではない私たちの世代が、同じ日本人の犯した過ちをずっと覚えておくということは難しい。しかし、今でも日本人に対するマイナスの感情が世界の至る

に残っているとすれば、私たちは過去をきちんと理解し、私たちなりの行動に移していく必要がある。

2つの博物館を訪れる途中で、連合軍共同墓地に立ち寄った。約7000名の兵士が、整然と並んだ白い墓の下に眠っている。その静けさ、その数の多さに、一人一人の人間の命というものを考えさせられる光景だった。一つ一つの墓石を見ると、名前や生年月日などの横に残された家族や友人からのメッセージが刻まれていた。例えば、次のようなものである。

‘ Lieutenant A Slade. Royal Artillery.  
10th July 1941. Age 35.  
Always in our memory. Sleep on, dear son.’

‘ 13207 Corporal. E. Trudill. Singapore Volunteer Corps.  
19th June 1941. Age 34.  
At the going down of the sun and in the morning,  
we will remember them.’

‘ Y 240109. Driver. H. Tweedale. Royal Army Service Corps.  
6th June 1943. Age 34.  
I’ll see you again whenever spring breaks through again.’

‘ 283876 Lance Corporal. A. C. Ferguson. The Gordon Highlanders.  
9th August 1945. Age 34.  
The road was hard, his pleasures few,  
he didn’t deserve what he went through.’

‘ 7654858 Corporal. T. W. J. Burden. Royal Engineering Corps.  
9th August 1943. Age 37.  
Resting where no shadows fall until we meet again. Mother.’

イギリスはThe Commonwealth War-graves Commissionを持ち、50以上にのぼる旧大英帝国諸国における兵士の慰霊にあたっている。戦争博物館の近くには日本軍慰霊塔もあった。鉄道建設で犠牲になった連合軍捕虜やアジア諸国の労務者のために、1944年に日本軍によって建立された慰霊塔だという。終戦前に、連合軍捕虜をまだ酷使していた時期に、どうして慰霊塔などが建立されたのだろうか？何十万、何百万もの「死」の上に、日本軍が得ようとしたものは何だったのだろうか？ これらについて、きちんと見つめなくてはならないと思う。

こう書いていくうちに、『外国の教科書の中の日本と日本人』にあった言葉を思い出した。この言葉を最後に記したいと思う。「過去を知ることには現在を理解するのに役立つ。なぜなら過去の出来事や真実は、少なからず現在をつくっているからである。」

### 1. はじめに

1999年3月7日、私たちは在タイ日本大使館を訪問した。日本大使館は、バンコクの中心地にあるサーミットタワーという高層ビルの10階に位置していた。ビルは2つのセクションに分かれており、1階のインフォメーションであちこち回されたせいで、日本へのビザ申請窓口など多くのタイ人が訪れている様子も見ることが出来た。今までは「大使館」や「領事館」と聞くと、在外邦人が滞在先でトラブルに遭遇したときにすばやく対処し、その安全を確保するといった「邦人保護」のイメージのみが強かった。だが、今回の訪問にあたって外務省から送付された資料を読み、様々な役割と機関に分かれていることを知った。このレポートでは、外交という観点から日本大使館とタイとの関わりについて、広報文化部長の船山氏にお話を伺ったことをまとめてみる。

### 2. 大使館について

大使館は外務省に属し、その組織は大臣官房他10局3部の本省と、世界各地にある大使館、政府代表部などの181の在外公館から成っている。在外公館には大使館、総領事館、領事館、政府代表部などがあり、これらの在外公館には、全部で約2800名の職員が働いている。在外公館は、外国と外交を行う上で重要な拠点となる機関である。現在世界各地に181あり、大使館、総領事館、領事館、政府代表部などがあり、それぞれに異なる機能を備えている。

大使館は、基本的に各国の首都におかれ、その国に対し日本を代表するもので、相手国政府との交渉や連絡、政治・経済その他の情報の収集・分析、日本を正しく理解してもらうための広報活動などを行っている。総領事館や領事館は、世界の主要な都市に置かれ、その地方の在留邦人の保護、通商問題の処理、政治・経済その他の情報の収集・広報文化活動などの仕事を行っている。政府代表部は、国際機関に対して日本政府を代表する機関で、国際連合、ウィーンにある国際機関、ジュネーブにある国際機関と軍縮会議、OECD（経済協力開発機構）、EC（欧州共同体）に対する政府代表部などがある。

### 3. 広報文化部について

今回私たちが訪問したのは、大使館の広報文化部というセクションである。ここでは、以下のような活動が行われている。

#### (1) 文化交流関連業務

国際交流基金バンコク日本文化センター主催文化事業への協力、後援名義の付与、日本関連文化事業の紹介等を行っている。

#### (2) 広報・プレス関連業務

日本の外交政策の広報、当館業務等に関する広報活動を行っている。具体的には、日本に関するニュースの記事を作って新聞社や関係者に送ったり、Enquiry Service、広報誌（タイ語）の発行、広報ビデオの貸出、各種広報資料の配布等を行っている。

### (3) 留学関連業務

毎年100名以上の留学生在がタイから日本へと旅立つ。このような文部省奨学生の選考・情報提供も広報文化部の仕事の一つである。

私がずっと大使館の主な業務としてイメージしていた「邦人保護」は、別の建物にある領事部で行なわれているとのことであったが、昨年に日本人が巻きこまれたトラブルについても伺ってみた。よくあるトラブルは、ホテルの部屋内での盗難。日本のホテルと同じように考えていて、貴重品を部屋に置いたまま外出するのは大変危険なのである。また、日本人はスリ、置き引き、モーターバイクによるハンドバッグの引ったくりなどの被害に遭いやすいそうだ。私たちも、町を歩く時は「自分の身は自分で守る」ということを常に頭において行動し、事故を未然に防がなければならない、と注意された。

### 4. 日・タイ関係

日本とタイの関係はアユタヤ王朝時代からはじまった。600年前、沖縄とタイとの間に交易があった。タイからの輸入品は鹿の皮(鎧に使用)が主で、日本からの輸出品は刀だった。この時代にかんりの数の日本人がタイに移民。アユタヤに日本人町が出来、そこには当時、すでに1000人も日本人がいた。アユタヤには、今でも日本人町跡がある。アユタヤの日本人町にはスタディーツアー中に訪れる機会があったが、何百年も前にタイのこの地で1000人も日本人が行き交っていた当時の様子を想像するのは難しかった。

第2次世界大戦時に、タイと日本は一時同盟関係になるが、この前に、プーケット島で戦いが行われている。この同盟は違法だとの主張があり、自由タイ運動が起こった。1970年代、タイで反日運動が起こる。これは10年から15年も続き、日本商品不買運動がその主なものだった。この原因は貿易不均衡問題である。

1980年代後半は、対日感情に変化がみられる。これは、様々なレベルで日本とタイの交流が盛んになったことに起因する。その主なものの1つに、SVA等に代表されるNGOグループなどによる、大使館を介さない交流が挙げられる。大使館でのお話の中に、SVAの草の根国際協力活動という、まさに私たちが今回タイで訪問してきたNGO団体名を聞き、嬉しく思った。その後、日タイ関係は様々な面でパイプが太くなった。特に、日本政府による新宮沢構想がタイの人々に高く評価されたそうである。というのも、この構想はタイへの直接投資や人的交流を促すものだったからである。これによって、対日感情は改善されたということであった。

さて、現在はタイに日本文化が大量に流入している。特にタイの若者文化には、日本の影響が強く見られる。バンコクのような大都会では、茶髪で厚底サンダルをはいた女の子をよく見かける。CDショップに行くと、今日本で大人気のラルク・アン・シエルやスピード、グレイなどのポスターが貼ってある。ホテルのテレビでも、日本でも放映されたばかりのドラマが、ほぼオンタイムで放送されているのを見て、皆で驚いたりもした。日本でお馴染みのドラエモンやポケモン、ウルトラマンは、こちらでも人気を博している。昔に比べて、タイの人々の日本に対する警戒心は薄れ、オープンになってきていることが分かった。また、大学入試の選択科目に日本語が加えられており、そのために日本語を中学校で教えているところも増えてきて



いるそうである。

## 5. 外交官という仕事について

船山氏がタイに赴任されてから、もう10年になるそうだ。外交官になるためには、さぞかし外国語の能力が必要とされるのであろうと思ってお聞きしてみたところ、「いくつもの外国語を操る能力をもっているのは当然の条件ですが、外交官に最も必要とされるのは、日本語能力です。」という答がかえってきた。外交交渉の際に相手が話したポイントをきちんと捉え、なおかつ自分の言葉で自分の意見を表現し、さらに日本へ報告しなければならないという、まさに「言葉」をあやつる仕事で、そのためには日本語がしっかりしていないと話にならないそうだ。外交官の仕事の醍醐味については、ASEANなどの会議において、通訳を介さないで各国の首脳と会話する時、自分が外交における一つの歯車になっているという実感と、臨場感があることだ、との事だった。

船山氏は、このままずっとタイに留まるわけではない。一つの国に滞在する年数は平均して2年～3年だから、10年は長いけれど、ここに來られる以前はアメリカに勤務されていた。次に希望する赴任地は、ASEAN諸国のうちのどこかだそうである。

外務省という国際的なイメージから、仕事における男女差はまったくないものと想像していた。が、この点に関して、船山氏からは少し保守的な考え方が聞かれた。船山氏が指摘されたのは、女性と一緒に働くことについての問題点だった。女性が出産で仕事を休むのは当然の権利ではあるが、その分チームの中で仕事をする労力が欠けることになる。専門的な仕事柄、その埋め合わせのできる臨時スタッフを簡単に用意できるわけではない。そのため、多くの仕事のカバーを他の女性スタッフと男性スタッフがしなければならないので、実際には大変であるとのことであった。法律で国家公務員の定員が決まっているので、人手が足りないからといって簡単に人員を増やしたり減らしたり出来ないのからである。船山氏によると、女性にとって外務省の勤務環境は非常にハードなものであり、それを取り巻く労働環境にも厳しいものがあるようであった。しかしながら、外務省では女性職員が活躍していることが外務省発行のパンフレットや山口県で行われた講演会（杉田明子氏：儀典、松田弥生氏：首相通訳）でも伺われた。近年の橋本国会議員の出産に関わる論議のこともあるが、働く女性への労働福祉がさらに向上することが望まれると考える。

## 6. おわりに

今回、タイの日本大使館の広報文化部を訪問するという機会に恵まれた。アポイントを取って下さった西日本国際交流協会の野村専務理事に御礼申し上げたい。「外交官はエリート」というイメージがあったので、お会いする前はとても緊張していた。ところが実際にお話してみると、船山氏はとても気さくで感じのよい方だった。国を代表し、様々な国の人々と接するこのようなお仕事は、このような性格を持った人でないと務まらないのだろう。タイが好きという氏の言葉の中に、異文化に適応されて仕事をしておられる様子が分かるような気がした。

今回、日本大使館に訪問してお話を伺うまでは、「外交」という言葉は私たちの普段の生活において関係ない次元のことだと思っていた。だが、今回のお話のなかで心に残ったのは、

「日・タイ関係が改善したのは、NGOなどによる大使館を介さない人的交流が拡大したからだ」という言葉だった。NGOの一員として海外に出かける人は年々増加し、留学や仕事で海外へ出る人も急増している。先日の朝日新聞の記事によると、その割合において、女性の数が男性の数を越えたそうである。そういった海外に出かける一人一人も「民間外交」の役割を担っていると考え、せめて日本についての誤解を招くような行動は避けるべきであり、さらに積極的な意味での「民際外交」を展開するべきであろう。日本や日本人に友好的な国や人々を1つでも、1人でも多くすることが、多くの資源を海外に頼らなければならないこの国が国際社会で生きていくために必要である。

今回のタイ訪問に際して、タイ国政府通商代表事務所広島のパンニー・スワントゥピントン所長の講演を聞き、タイのキャリアウーマンのやさしく強い人柄に触れることが出来た。また、(株)大林組宇部事務所の伊豆本所長からは、ご自身がタイ語に翻訳された広島のパンフレットを頂き、大使館の広報部をはじめ、各団体や学校の図書館などにお渡しすることができた。伊豆本氏は企業からの海外派遣中に独学でタイ語をマスターされている。同じく、タイ赴任中に独学でタイ語をマスターされたSVAの岩船氏が「タイが大好き」と言われた熱っぽい言葉、そしてこの度日本大使館広報部の船山氏が「タイが大好き」と言われた10年の生活などを思い、タイとタイ文化、タイの人々の魅力とは何かと、あらためて考えさせられている。

## 参考文献

### 第1章

- 河部利夫 『タイのこころ』 異文化理解のありかた 1997年  
デイビッド・ウッドワース著 バックストン美登利訳 『国際ボランティア活動』 1993年  
JVC「NGOの挑戦」編集委員会編 『NGOの挑戦』上、下 1990年  
『Annual Report』 shanti9 1999年

### 第2章

- 小野澤正喜 『アジア読本 タイ』 1994年  
加藤益雄 他 『アジアの人びとを知る本』 1992年  
サニッスダー・エーカチャイ 『語りはじめたタイの人びと』 1995年  
平野裕二 他 『学習子どもの権利条約』 日本評論社 1998年  
日本保育学会 『諸外国における保育の現状と課題』 世界文化社 1997年

### 第3章

- A Small World Production制作 『切り売りされるタイ』 1991年  
佐藤俊雄監訳 『観光のクロス・インパクト』 大明堂 平成2年  
『個人旅行 タイ』 昭文社 2000年  
山下晋司編 『観光人類学』 新曜社 1996年  
三村浩史訳 『観光・リゾート開発の人類学』 けい草書房 1991年

### 第4章

- 国際交流基金・日本語国際交流センター編 『海外の日本語教育の現状』 大蔵省印刷局  
1998年  
月刊『日本語』 1999年2月号、6月号 アルク  
インターネット 『世界の日本語教育国別情報 タイ』

### 第5章

- ホルヘ・アンソレーナ（ほか） 『居住へのたたかいアジアのスラムコミュニティから』  
明石書店 1987年  
草間八十雄 『貧民街』 明石書店 1987年  
籠山京 『ボランティア・アクション、パタヤの解散』 ドメス出版 1981年  
スミット・ヘーマサトン、アキン・ラビーバット著、野中耕一訳 『アジアにかかる虹、  
スラムのともしび・プラティープ先生』 大同生命国際文化基金 1987年  
ホルヘ・アンソレーナ、伊従直子 『スラム民衆生活誌』 明石出版 1984年

### 第6章

- 石渡 延男編 『外国の教科書の中の日本と日本人』 一光社 1998年  
古川 利治 『泰緬鉄道』 同文館出版株式会社 1994年  
渡辺 幸一 『イエロー 差別される日本人』 栄光出版社 1999年  
歴史教育者協議会編 『平和博物館・戦争資料館 ガイドブック』 青木書店 1995年

### 第7章

- 外務省大臣官房国内広報課 『外務省』  
在タイ日本大使館ホームページ  
大倉弥生 『援助はタイを豊かにするか』 岩波ブックレット  
綾部恒雄編 『もっと知りたい タイ』 弘文道 昭和57年  
西野順治郎 『日・タイ400年史』 時事通信社 1978年

## パートII：異文化ミニ体験記

## ・「サワディー カップ」と「コーブクン カップ」の落とし穴

タイのこんにちはの挨拶「サワディー カップ」、そしてありがとうの挨拶「コーブクン カップ」。タイの人々の挨拶のスタイルを美しいと感じた。その微笑はもちろんだが、ワイ（合掌）と共に発せられる姿は心洗われる気持ちさえする。ホテルではもちろんデパートでも、そしてテレビのニュースキャスターまでもが合掌しながら「サワディー カップ」と言っている。私たちがタイ式の挨拶をしようと、ホテルでも買い物をして、合掌付きで「コーブクン カップ」と言っていた。

そもそも私たちが合掌付きの挨拶を見たのは旅の3日目、センサイ村での幼稚園でのことだった。「サワディー」と、左足を後ろに折り曲げながら手を合わせて言う子どもたちの姿を「かわいいー！」と思い、それ以後、前述のようにタイ式挨拶を見様見真似で実践していた。

ところが、旅の最終日、帰国便に乗る6時間前になって、私たちのタイ式挨拶は誤りだったことを知らされた。それは、夕食をガイドのプーさん行きつけの店で取ったときのことだった。夕食を終えた私たちは食事を給仕してくれていた兄弟らしき男の子たちに「コーブクンカップ」と挨拶をした。するとガイドさんが「そんなことはなくてもいい」と言ったので、理由を尋ねたところ、「明らかに年下とわかる人に合掌付きで挨拶をするのは失礼」とのことだった。合掌付きで挨拶をすると、その子の寿命が短くなると言われているらしい！！

また、合掌する際、完全に掌と掌を合わさず、心持ち掌をふくらませながら手を合わせるのが正しい。このふくらみを持った合掌はハスの花の形を意味しており、ここでも仏教信仰が生活のなかに入り込んでいることがうかがえる。そして挨拶する相手によっても合掌の位置の違いがある。いちばん丁寧なのは合掌したときに親指の先が鼻の穴に近づく姿勢で、僧侶や年上の人にはこの姿勢で挨拶するのが良いとされるそうだ。友達などには胸の前でするのが一般的なようである。

私たちはこの旅の中で何人の子どもたちに合掌付きで挨拶をしただろう。おそらく50人は下らないのではないだろうか。今思えば、私たちの挨拶に幼稚園の先生方が苦笑いをしていたような気がする。どうして注意してくれなかったのだろうか。外国人だから？ 子どもの頭を撫でてはいけないなど、一通りのタブーをあらかじめ本で読んでいたつもりだったが、基本的なあいさつのルールで大失敗をしてしまった。

(N. S.)

## ・チーオン（黄衣）をまとった人々

タイの街を歩けば、黄色い袈裟を身にまとった人々をあちらこちらで見かけることが出来る。僧侶たちである。タイの男性は人生のうち一度は修行に入るものとされている。すぐに還俗する場合がほとんどであるが、一生修行する人もたくさんいるといわれている。彼等にはしてはいけないことがたくさんある。中でも女性に触れた場合は今までの修行がすべて無駄になってしまうといわれている。それが外国人女性でも同じことである。私たちがある寺院で若い僧侶たちと写真を撮ったのだが、その際も「くれぐれも触れないように、頭は彼等よりも低くするように」と言われた。年齢に関係なく僧侶は尊敬される立場にあることを肌で感じた経験だった。

別名エメラルド寺院と呼ばれるワット・プラケオに行ったときもこのことを感じた。その

日私はサンダルだったのだが、入り口で黒いゴム製の健康シューズのような履き物に履きかえるように言われた。ノースリーブ、ミニスカート、短パンなどでは、寺院に入れないと知っていたが、履物にいたるまで制限があるとは知らなかった。しかし、考えてみれば寺院は本来僧侶たちが修行する場であって、観光地とは別物である。信仰のために寺院を訪れ祈り入るタイの人々と、その横を歓声を上げながら歩き回る観光客。そんな対照的な光景を目にし、僧侶の前に跪くタイの人々の熱心な祈りの姿に近づきがたい印象を受けた。

僧侶は尊敬される立場の人々であるということは、日常生活のなかでもあらわれている。例えば、バスのいちばん後ろの席は僧侶の席である。たとえ満員のときでも、僧侶が乗車してきたとき、後ろの席の人が僧侶に席を譲らなければならないという。仮にいちばん後ろにお年寄りや子どもが座っていても、彼等は僧侶に席を譲るそうである。

バンコクでセブンイレブンに立ち寄った時、そこで日本では見られないものを見ることができた。「一休さんジュース」である。私たちが幼いころテレビで見ていた、「母上様、お元気ですか。一休」の、あの一休さんである。ガイドのプーさんの話によると、プーさん（33歳）が子どもの時からアニメの「一休さん」はタイで放映されていたそうで、仏教を大切にするというお国柄か、とても勉強になるいいアニメということで今も昔も根強い人気があるそうである。有名な「この橋渡るべからず」の話はどのように訳されたのだろうか。また、他のスーパーでは線香やろうそくなどが置いてあるコーナーに、チーオン（黄衣）や托鉢のときに使われる食器のセットが置いてあった。生活の中に仏教が欠かせないことがよく出ていると感じた。

タイでは本当にたくさんの僧侶を見かけたが、チェンマイの寺院で見た木陰でアイスクリームを食べていた若い僧侶たちが印象に残っている。その子どもらしい姿がうれしかったのと同時に、何となく安心した。

(N. S.)

## ・タイの王室

タイの人々は、王室に多大な敬意を抱いている。街中のいたるところにある現国王ラマ9世の写真や肖像画を目にするだけでもそれがうかがえる。

現チャクリー王朝が始まってからの歴代九人の国王のうち、国民にもっとも人気があるのがラマ5世と現国王であるラマ9世だ。1868年に即位したラマ5世は政治、文化、社会資本においてタイの近代化を徹底的に推進した指導者として今でも国民に敬愛されている。国内に初めて鉄道が敷設されたのも、学校が創立されたのも、この国王の時代だ。このラマ5世が建設したサマーハウスをアユタヤで訪ねた。芝生の青が涼しげで、色とりどりの花々のあふれるイギリス庭園を思わせる広大な庭園内には、世界の様々な建築様式を凝らした東屋が美しさを競っている。その中心にあるタイ式の東屋は、実はキリスト教の十字架型の土台をなしており、「仏教徒である国王は、隠れキリシタンだったのか？」などという説明がガイドによってなされていた。中国式の東屋で一休みすると、そこには中国商人から献上された品々が展示されていた。広大な園内を歩くのがいやな人には、電気自動車の貸出もあった。

ラマ5世の急死から若いラマ6世の統治へ、そしてその後の王室は1932年の自民党による立憲

革命などの試練を経ながらも存続し、現在のラマ9世に至っている。現国王は1946年に19歳で即位して以来、象徴的な存在である立憲君主でありながら度重なるクーデターや騒乱を鎮め、国民に深く信頼されている。みずから農業事業に乗り出すなど活動も精力的で、諸外国からの評価も非常に高い。常に国王の写真入りのロケットを身につけている現地ガイドさんから聞いた話によると、ラマ9世は雨が降らずに困っている農村を訪れ、人工の雨を降らせたこともあるという。

最近、日本では、「アンナと王様」という映画がヒットした。この映画は、1956年に制作された映画「王様と私」のリメイク版である。どちらの映画も、「後進国」の粗暴な王を、「先進国」であるイギリスの女性家庭教師が「教化」していくというストーリーになっている。このような内容がタイでは非常に評判が悪く、映画は今も上映禁止になっている。タイは立憲君主国である。だから、日本と同じように国王は象徴としての存在なのである。だが、タイの人々の国王に対する態度を見ると、まるで、国王を神のように崇拝しているように思える。

その国王の資産は想像を超える。所有している車は6000台という数字を聞いただけでもビックリする。国王の70年を祝う行事が華やかに展開されたのは、昨年秋。チャオプラヤ川のクルーズから眺める王宮は、黄金に光り輝いていた。そしてその黄金の瓦の足元ではまた、バンコク市内にあふれる貧しい人・人・人．．．も彼らなりの人生を生きている。タイの経済の8割近くを中華系の人々に握られ、貧富の差にはすさまじいものがある。政治や行政の腐敗も目を被いたくなるほどであるらしいが、人々の口は重く、ただ王室のみを誉め讃えるばかりである。ガイドさんの話では、「タイ人の多くの人々の心の支えは政治でも経済でもなく、王室のみ」ということであった。そんな人々の思い、王室に届いているのか、いないのか．．．

(K. O.)

### ・象って意外と毛が長いのね

チェンマイで「象乗り体験」をした。エレファント・キャンプには60頭以上の象がいる。エレファント・キャンプというのは、少数民族が一定の地区を居住区として持ち、そこで象と一緒に生活しているところへ観光客が来るようになっているものである。キャンプへ降りていく小道を歩くと、子象が川で水浴びをしていた。すると突然の拍手。これもショーだった。象よりも多かったのは私たちを含めた観光客である。見渡す限りの観光客の山、山、山。一瞬、どうなることかと思った。チェンマイはバンコクやプーケットに比べれば、格段と日本人観光客が少ない。それでもチェンマイ市内では数組に出くわしたが、ここエレファント・キャンプの観光客の大半は西洋系の人たちで、その他は中国人、韓国人の団体が多かった。

キャンプで最初に見た「象の水浴び」も、もちろんヤラセなのだが、それを取り囲む観光客の多さといったらものすごく、象越しに大勢の観光客が見えて、どっちが見せ物やらといった状態。私たちも観光客の1人を見て、「ねー、ねー、あの人ミスター・ビーンに似てない？」などど、観光客の方を見てちゃっかり楽しんでしまっていた。

その後広場で象の芸を見た後に、いよいよ象乗り体験！ 象の背中に2人乗り用の椅子がつけられていて、そこに乗ったのだが、象使いの人のイキな計らい（！？）で、私たちは1人ずつ象の頭に乗ることになった。すると、何かお尻にチクチク突き刺さるものが．．． よく見ると、それは針葉樹のような長さの、ちょっと太めの象の毛だった。象さんって毛のないツルツルしたイメージだった

のに。軽いショックを受けた。

象使いの人にカメラを渡すと、同じような写真を何枚も撮られる。「もういい」と言っても通じない。あまりフィルムを持って来ていなかった私は、使い捨てカメラを日本の2倍の値段で買う羽目になってしまった。

ここまで、楽しい思い出だったかのような書き方をしてきたが、心の底から楽しめたわけではない。というのは、象に乗って浮かれている自分と、象が先の尖った棒でつつかれ、強制的に芸や象乗りの仕事をさせられているのを見て、胸が痛んでいる自分がいたからだ。これを、日本の猿回しと同じような事だと考えると、タイの伝統文化であり、私たちが口を出すことではないようにも思う。現にタイにはこれで生計を立てている人々も大勢いるし、ここの象はそれぞれの家族の一員として世話を受けている様子がわかった。フィールドワークの事前に見たプログラムでは、東北タイでは象は大変大切に扱われており、ほとんど家族のように成長し、人間との付き合いのあることを知った。また最近では、ホームステイしながら象の世話をするようなエコ・ツアーもあって、人気が高いようだ。

タイではあちこちの観光地にエレファント・キャンプがある。私たちの訪れたチェンマイのものはまだ山の中で、自然に囲まれたところであったが、アユタヤやバンコク、パタヤなどのリゾートに出稼ぎに来ている象や象使いは、苛酷な状況の中で働いている。現に私たちが帰国してから1~2カ月後に、パタヤのエレファント・キャンプで象が暴れだし、観光客がケガをしたという記事が新聞に載っていた。西欧のホテルチェーン、例えば今回私たちが宿泊したプーケットのホリディ・インなどでは、象を救うためのキャンペーンもやっている。タイの象は、タイ観光の一つの資源であるから、それを守ろうという訳である。企業が寄付金を出してエレファント・キャンプの環境改善を行ったり、病気の象に医療をほどこしたり（大きいだけに薬代がものすごく高くつく）、また世界各国のNGOや人々に情報を送って寄付を募ったりしているそうである。

出稼ぎに出る象。象と人間が共存してきたタイ農村やタイ山間部の生活が急速に壊れつつあることを、エレファント・キャンプを訪れて感じた。 (N. F.)

### ・「こわい」—タイでは放送禁止用語です

仏教国タイでは子どもの頭を触ってはいけない。女性はお坊さんに触ってはいけない。…。タイでのタブーを頭にインプットし、心得ていたつもりだった。しかし、意外な落とし穴があった。それは言葉である。タイ語と日本語には似ている発音で意味が全く違うというものが結構ある。旅行中私たちが連発した言葉もその例外ではなかった。その代表的な言葉には「きれい・こわい・コーヒー」がある。特に「きれい」は現地のスタイル抜群の美しい女性、豪華なダンスや衣装、風光明媚な観光名所を見る度に私たちが、またナイト・バザールのようなお土産屋では店主たちが私たちに向かって、何度も口にしてきた言葉であった。「こわい」はぞうに乗った時にKさんなどは泣きながら連発し、ぞう使いの人がおもしろがって「コワイ。コワイ。」と、少しニヤけた表情で言っていた言葉であった。

5日目のプーケットで初めて、ガイドさんにその言葉の意味を覚えてもらうこととなった。その意味とは、きれいとはブスということ、こわいとは男性の性器、コーヒーは女性の性器をさす言葉の発音にとっても似ているということである。私たちは皆騒然とした。この時になってやっと、ぞう使いの人



がニヤけ気味に「コワイ」と言っていた真意がわかったし、お土産屋の店主が私たちに向かって言った「キレイ」という言葉が、本当は何を表していたのかという疑問のような、怒りのような何とも言えぬ思いが心の中に芽生えた。それ以来、現地の人に「キレイ」と言われても皆疑心暗鬼になって、それがあまりにひどい客引きの場合は日本語で「どうせブスって意味じゃん!」と言い返すようになってしまっていた。ガイドさんの話によると、「コーヒーを下さい」と言ったある日本人客など、ウェイトレスから総スカンをくったとのことであった。観光地では、今や日本人のこういった言葉に慣れているから知らん顔して受け答えするが、少し地方に入る時には気をつけた方がよいとのことだった。

言葉に関連してもう一つ感じたのは、高級ホテルのフロントやサービス係の人が日本語で「アリガトー」の様な言い方をすると、そのホテルの格が下がったような気分になるということだ。どんなに知識があって、外見的にも気品のある人でも、言葉遣いが幼稚だと幼く見えてしまうということは往々にしてある。日本においても、アジア系留学生のこうした日本語の発音は低く見られ、逆に西欧人の場合には普通に聞き流す傾向がある。タイのホテルの場合は、日本人観光客が多いから彼らなりのサービスのつもりで言ってくれたのだろうが、逆に日本人には現地語や英語で話してくれた方が、高級感があってよかったと思うのだから変なものである。

外見に加えて、言葉の遣いや言い回し、ニュアンスの違いによっても人間のイメージは作られる。このことだけで他人を判断することのないようにしたいとは思いますが、言葉は一度発してしまうと取り消すことはできないものなので、気をつけるようにしなければと思う。(N. F.)

### ・タイで見つけた六本木

チェンマイ 3 日目の夜。午前中にモン族の住むセンサイ村を訪問し、5 時間車に揺られてホテルまで帰って来たにも拘わらず、押さえ切れない購買意欲を抱いて、私たち 6 人はナイトマーケットへと繰り出した。まるで祭りかと疑わんばかりの人の数と出店が、はるか彼方まで続いている。これが毎日というから驚きだ。

行動しやすいということで二人ずつに分かれ、2 時間後に待ち合わせることにした。歩き出して 1 分と経たないうちに、出店から声が掛かる。「キレイネ」「カワイイネ」と何度言われたことだろう(ちなみに日本語のキレイは、タイ語のブスにあたるというというから御用心・・・)。初めはいちいち反応して照れていた私たちも、客引きのために適当に言っていることに気づいてからは振り向きもしなくなった。「キレイ」と言われるのにすっかり慣れてしまったというのも贅沢な話である。どこで日本人と見分けるのか分からないが、何度「ニイハオ」と答えてもばれてしまうから不思議だ。

そんな客引きをかわしつつ歩いていると、あるバーにたどり着いた。そこで私たちはおもしろい出来事に遭遇したのである。「Roppongi」と書かれた看板の下には「日本語話せます」の文字。異国の地で思いがけず見つけた日本にしばらく立ち止まって笑っていると、一人の男が近づいて来た。

「日本人デジョ。イツ来タノ? ドコニ泊マッテルノ?」と、その若い男は日本語で話しかけて来た。2 言、3 言話していると「僕モ日本人ナンダヨ。日本ニ住ンデタ。」と言う。どこから見てもタイ人である。このうさん臭いタイ人に少し意地悪をしてやろうと思った私たちは、名前を言わせることにした。言葉に詰まると思ったのだ。ところがあるろうことか、その男はこう答えたのである。「ヨシダツヨシ!」。あぜんとしてしまった。その後、自称「ヨシダツヨシ」は、私たちのホテルの名をしつ

こく聞くので、危険を感じた私たちはうまくかわして「Roppongi」を後にしたのだった。

チェンマイでも、後に訪れたプーケットでも、「愛シテル!」「アジノモト!」などと、よく声をかけられた。なかには「オバサン」や、顔をのぞき込んで「ヤスイネー」と言われるなど、不快なものもあった。それだけ日本人観光客が多いということだろう。また、日本人が無防備で声をかけやすい、だましやすい、ということにもなる。確かに、タイの至るところで日本人を見かけた。かく言う私たちも、車内にパスポートを残したまま観光に行き、先生を驚嘆させた（日本人のパスポートは100万円で売れるらしい!）。旅は気分を開放的にさせる。バー「Roppongi」の話は皆で大笑いだったが、お気楽日本人は充分気をつけなければならないと感じた。それにしても彼は、「ヨシダツヨシ」という名前をどこからもって来たのだろうか。いまだ謎である。（T. K.）

### ・恐怖のくじ引き

「将来は兵隊に入りたい。」シャンティ寮を訪れた際、18歳のチューサック君はそう語っていた。これはモン族だから、タイの軍隊に入って偉くなりたいという意味。しかし、ほとんどのタイ人はそうは願ってないようである。

バンコク市内を移動中の車内で、この旅始まって3人目のガイド、プーさん（日本語で「かに」の意味らしい）は、タイについて様々なことを教えてくれた。兵役の話は、私たちが驚いた話の一つである。タイの男性は20歳を迎えると、軍隊に入る義務があるという。しかし、全員が、という訳ではなく、行かなくてすむ人もいる。その選別は事もあろうに、くじ引きで行われるのだ。箱の中に赤と黒の玉が入っており、成人を迎えた男性は恐る恐る玉を一つ取り出す。赤を引けば入隊である。赤という色は、日本の戦地招集の赤紙に通じるものがある。兵役は3年間で、家に帰って来られるのは週に一度だそう。プーさんも20歳のときにこの「恐怖のくじ引き」をして黒玉を引き、辛くも難を逃れたそうである。赤玉を引く確率は70%だというからかなりの幸運の持ち主だ。日本では成人式を聞いて祝う20歳も、タイでは皆、複雑な心境のようだ。

余談だが、プーさんは私たちのインタビュー訪問先や、個人的な外出にも付き合ってくれ、本当に良く案内してくれた。「タイの女性は綺麗だからいいですね。」と言うと、「タイ人女性は気が強く怖いからいやです」との返答。しかしそう言いつつも、タイでは15万円もするという携帯電話に、何度も彼女からコールがあったのを私は知っている。今年の12月に結婚を控えているプーさん、おめでとう。そしてコープクンカー（ありがとう）。ところで、プーさんはダブルス。母親がタイ人で父親が日本人だと教えてくれた。（T. K.）

### ・良い品あります —タイの電話帳—

宿泊先のホテルの部屋で電話帳を開いたときのことである。私は思わず自分の目を疑ってしまった。そこにはたくさんの若い女性の写真とともに、日本語の広告が掲載されていた。売春広告である。なかには「良い商品をたくさんそろえております」「いつでもどこでも何度でも」といった、こんな広告を載せることが許されているのだろうかというような信じられないようなものもあった。

広告は見開き全部を占めるほど大きいものもあり、数ページにわたって娯楽産業（性産業）の広告

が掲載されていた。女性言葉で書かれた手書きメッセージが日本語で書かれていることや、「日本語できます」などの注意書きがあることから、日本人男性向けのものだと思われる。

これほどあからさまに日本人男性を対象にした広告がたくさんあるということは、それだけの需要が日本人男性の側にあるということである。日本の男性たちが「買春ツアー」を組んでアジアに押しかけているという恥ずべき実態は、アジア各国の女性たちをはじめ、国際的な非難を浴びている。日本国内ではできないことを、他の国であればしてもよいのか。そんなはずはあるまい。自分の欲望を満たしたいがために、女性の人権を無視し、お金ですべてを片付けるという行為は決して許されるものではない。

だが、皮肉なことに、娯楽産業が一部の人々の生活を支えているというのも現状である。売春は、生活ができなくなってしまったとき、教育を受けていない少女が家族を救うためには唯一可能な手段なのである。もちろん少女たちが望んでいるわけではないが、仏教心の厚いこの国では家族のことを思うがゆえの選択の一つとされている。そういった親孝行の気持ちに商売や犯罪がつけ入る。まともな支払いの受けられない少女、エイズに感染し家にも帰れず、ひっそりとホスピスとなった寺院に入る少女、せっかくNGOの助けで手に職をつけたと思ったら経済危機で失職し、また売春に戻らざるを得ない少女。

タイでは児童買春を禁じ、見つかると劣悪な環境の刑務所に入れらるということが広く知られるようになって以降、買春の群れはタイの近隣の国々に流れつつあるという。その一つがタイと国境をへだてたラオスである。ラオスでは児童買春が日本円で160円程度でできるという風説もあって、今多くの日本人男性の団体がここに流入しているそうである。これを止めるには、日本国内の女性のパワーが必要だと言われているが、こういった状況があることをもっとメディアが取り上げて、人々の意識を高めるべきではないだろうか。

(R. M.)

### ・紙がない！

タイのトイレには紙がない。紙は使わない。トイレに入ると、どちらを向いて用を足すべきなのか一瞬考えてしまうような便器と、コンクリート製の水槽が備え付けてある。用を足したら、わきにある水槽から水をすくって左手でお尻を洗ってモノを流す、というのが正しい使用法らしい。このとき使うのは左手である。仏教では左手は「不浄」の手で、右手は食事をするときを使う手とされている。トイレの外にも水を流す人が多いのか、床がビショビショで注意が必要だ。

私は大きなカルチャーショックを受けた。頭では理解できても、実際には最後まで紙を使わずに用を足すことはできなかった。初めてこのトイレを使ったときは、持参したティッシュペーパーがちゃんと流れていったのか不安で、大量の水を流してしまった。流したモノが便器の奥にすっと消えていくのを見ると妙な安心感をおぼえたものである。

トイレの様式は様々であった。ガソリンスタンドで立ち寄ったトイレにはシャワー室も備え付けられていた。ホテルのトイレは見慣れた洋式トイレだったし、学生寮はいわゆるユニットタイプで、トイレとトイレ用の水槽、水浴び用の水槽が設置されていた。

タイでは食事前に体を洗う習慣があるため、一日三度、水浴びをするらしい。日本のよう

に水や湯につかったりはしない。タイの人に言わせれば、「足を洗う水につかるなんてとんでもない」ことなのである。とすると、タイの人たちはきれい好きだといえる。日本でも夕食前にお風呂をと言う人はいるが、毎回、朝昼晩の食事前にシャワーを浴びたりしていたら、かなりの潔癖症だと思われるにちがいない。タイは暑いからそんなに度々シャワーを浴びるのでは？と思うかもしれないが、東北タイの朝夕の寒さの中で、風邪をひかないようにと私たちは水浴びをパスしたほどである。しかし、モン族の生徒たちは寒さにかまわず水を浴びていた。

トイレやお風呂というのは日常生活とは切り離すことができないものだけに、その地域の文化がそのまま反映されているといえる。タイ式のトイレを使いこなせなかったということは、その文化を受け入れることができなかったということなのではないか。いつかまた、タイ式トイレに再会する機会があれば今度こそチャレンジしたい、と思うのだが、...

(R. M.)

## ・マイペンライ

バンコクは人口1千万人の大都市である。専用車で空港からホテルへの移動中に見たバンコク市内の様子は凄まじく、車、車、バイク、バイク・・・日本の大都市以上の交通渋滞であった。またクラクションの音もすごい。現地のガイドの話によると、タイでは免許は半日で取れるらしく、自動車学校に通う必要はないそうだ。また免許取得代金も1000バーツ(約350円)も出せば一生更新せず使えるのである。1、2ヵ月かけて免許を手に入れなければならない日本人にとってはうらやましい限りである。しかし、良く考えればバンコクのような大都市で、昨日まで車に乗ったことのないような人が運転をしているのは大変恐ろしいことである。運転の知識も技術も十分でないままの人の車が道を埋め尽くしている。「歩道橋以外では絶対に道路を横断しないように」というガイドの固い忠告がなされた。タクシーのドライバーやバスの運転手でさえ運転が荒いように思える。ウインカーは出さない、強引に割り込むはで、乗っている身としては気が気でなかった。

タイでは時間通りに目的地に到着するのは困難である。その原因は交通渋滞もさることながら、交通事故にあるらしい。日本では、大都市で無免許に近い運転をするなんて考えられないことだが、タイでは当たり前のことなのである。ここにタイ人の大らかさ、悪く言えばおおざっぱさがあるのだなあと感じた。

タイ人の大らかさを感じたもう一つの出来事がある。私たちはバンコクでかなり高級なホテルに宿泊したわけだが、そこではニューハーフの男性が働いていた。その光景があまりにも普通だったので、その時は何も感じなかったが、よく考えればこれも日本ではあまりないことだと思った。また私たちは最終日にニューハーフショーを見に行ったのだが、そこには老若男女問わず多くの観客が歓声を上げていた。ダンサーたちも自分の仕事に高い誇りを持っているように見えた。すごいなあと感じつつ、こういったことは別に特別なことではないのだなあと感じた。未来のことより現在のこと、畜財よりも浄財をよしとするタイ人の生き方。「そんなにあくせくしなくても、そんなにかたく考えなくてもいいじゃない」と言う声が聞こえてきそうである。私は今回の旅を通して、タイの人々の「マイペンライ(気にしない)」の精神をかいま見たような気がする。

(M. T.)

## ・日本の若者文化タイをいく！

ある夜、私たちは一つの部屋に集まりテレビを見ていた。そこには見慣れた映像があった。中山美穂に金城武、ドラマ「二千年の恋」を放送していたのである。しかも先週放送されたばかりのものであった。タイでまさか日本のテレビが見れるとは驚き、また反対にタイで日本文化はどのくらい知られているのか疑問に思った。

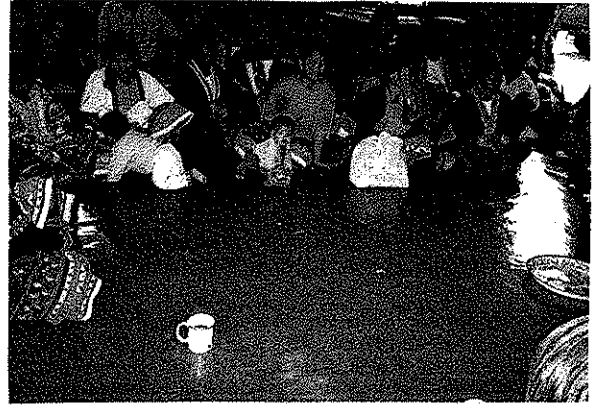
その後、日本国大使館を訪問した際に、タイでの日本文化の流行についてのお話を聞くことができた。現在タイでは日本の文化、特に若者文化が大流行している。例をあげると、プリクラ、マンガ、ファッションなどである。プリクラは私たちもデパートなどでよく見かけたが、日本から機械を輸入しているのか日本語が書かれていた。また、デパート自体も「SOGO」に「伊勢丹」など馴染み深いもので、その内装も日本のものと同じであった。マンガについてもドラえもん、ウルトラマンなど日本のマンガが流行していて、子どもたちは日本語が分からないまま「ドラえもん」という言葉を口にしていた。ファッションに関しても若者たちの服装は私たちと同じだった。大使館で聞いた話によると、茶髪や厚底ブーツなども流行しているようだ。

以前は日本文化の導入にいくらかの規制があったそうである。タイの文化が日本色に染まるのを避けていたのだそうだ。現在の日本文化流行の背景には、タイ人の日本に対する感情の変化がある。戦時中のこと、そして戦後の経済摩擦といった事から、タイの人々は日本に対して非友好的であったが、近年になり日本企業が続々と進出することで、タイの人々の生活も豊かになり、タイ人の生活が日本と切り離せなくなったことから、日本に対する感情が変化したようである。私たちが見たドラマ「二千年の恋」の背景にもこうした事情があったのかと、改めて歴史の深さを感じたものであるが、では、こういった現代日本の若者文化が伝えようとしているものは何なのであろうか。イギリスで流行したロックもパンクもミニスカートもヒッピーも、それぞれ若者からその時代への反逆的なメッセージがあったという。私たち日本の若者がアジアの若者に発信しているメッセージとその影響といったことをもっと調べてみるのが、反対に日本文化について知ることのなるのかもしれない。

(M. T.)



第1章  
 シャンティ寮にてモン族の高校生にインタビュー  
 (前列左端：プラガイゲオさん、前列左から3人目：  
 チューサク君、前列右から2人目：SVAバンコク  
 事務所員、前列右端：SVAバンコク事務所の岩船氏)



センサイ村で女性グループと交流  
 お手製の民族衣装を身にまどって



第2章  
 スアンプルー地区スーンデク保育園にて  
 みんなで元気に朝の会



センサイ村保育園にて  
 「列車でお部屋にかえりましょう！」



第3章  
 スアンプルースラム訪問  
 保育園の子ども達とすっかり仲良しに



クロントイタイ地区図書館にて  
 図書館スタッフとともに



第4章  
ラジャパット大学にて  
日本語教員の森隊員（後列中央）と



第5章  
ホリディ・イン・プーケットでインタビュー  
（後列中央がGeneral Manager, Mr. Wolfgang氏）



第6章  
連合軍捕虜を監視する日本兵のロウ人形  
（捕虜は腰布のみ、日本兵は軍服）



クワイ河鉄橋を渡る  
今にも朽ち果てそうな木に恐怖を感じる



第7章  
アユタヤの日本人町跡  
ここからバンコクまで川下りのクルーズ



スタディーツアーの中休み？  
プーケットのビーチにて